川柳雑誌

麻生路郎☆主宰

八月號

昭和廿二年七月十日第三種郵便物認可
昭和廿三年八月一日第三種郵便物認可
（毎月一回一日発行）創刊大正十三年・通巻三百七十五号

No. 375

Pensoj flugas trans la land-limon

THE SENRYU ZASSHI

—9月本社句会—

"兼題"
世間
改札
泣き顔
日ぐせ

川柳雑誌社主催

本社八月句会

大阪市内の奥座敷！

この涼秋会場で夏の一夜を川柳三昧にひたりましょう。初心の方も誘ってご来会ください。

日時 八月七日（木）午後六時

場所 光明寺（電話(77)九二六〇）
大阪市天王寺区下寺町二丁目バス停前
（市電下寺町又は日本橋三丁目下車）

兼題
「学歴」（二句）麻生路郎選
（この句は午後六時半発表）
「マネキン」（三句）戸田古方選
「別居」（三句）市場没食子選
「札束」（三句）真鍋一瓢選

席題 三題（当日発表）

句評 清水白柳子

呈賞 各題各位 各路郎選天位に不朽洞賞

会費 五拾円

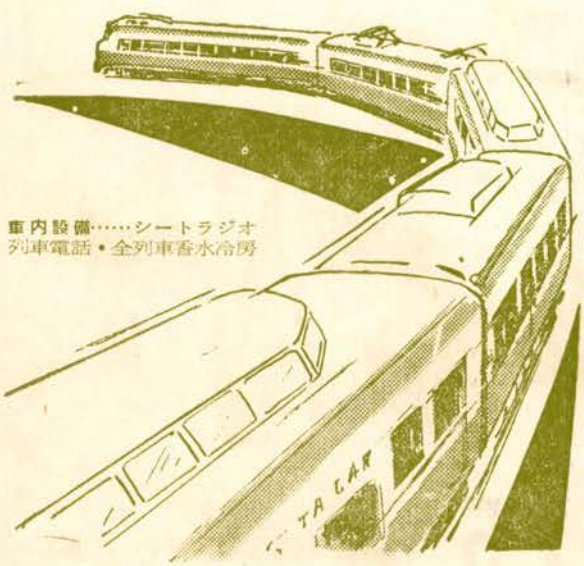
幹事 紫香・淡舟・いさむ・潮花・文秋・蒲佑・狂一・与呂志・白水・水堂・月都・薫風子・永断・一三夫

★ 投句だけの方は郵券三十円
同封（〆切毎月五日）

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地
川柳雑誌社句会部
電話住吉 (62) 八〇八一番

ますます便利になった名古屋ゆき

近鉄特急増発1日9往復



話題のデラックス展望車 ビスタ・カー

① 大阪・宇治山田間1日2往復運転
② 二階展望室は座席が10度外側にむきます
③ 全列車空気バネ台車で振動がありません
④ 座席指定の特急料金もいままで通りです

大阪上本町発	近鉄名古屋発	宇治山田発
7.40	8.00	8.40
8.40	9.00	9.40
○✤ 9.40	○✤ 10.00	
11.40	12.00	**12.40**
13.40	14.00	14.40
15.40	16.00	16.40
17.40	18.00	**18.40**
○ 18.40	○ 19.00	
19.40	20.00	20.40

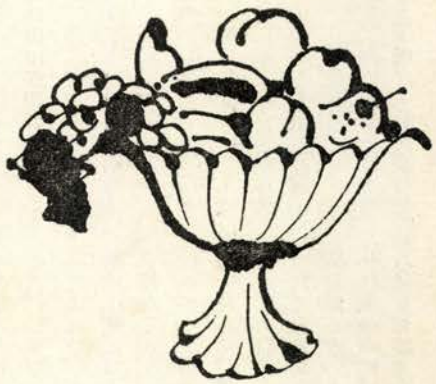
太字 … 大阪・宇治山田間 ビスタ・カー運転
○印 … 大阪・名古屋間のみ ✤印 … 平日運転

座席指定特急券 5日前から発売
名古屋へ250円 宇治山田へ200円
大阪上本町駅 近畿日本ツーリスト 日本交通公社

近畿日本鉄道

窓口談義

夢を抱いて



私は子どもが好きだ。それが自分の子どもであろうと他人の子どもであろうと。

私の多くの子どもは、それぞれに自分の運命を背負うて巣立って行った。早世したのは別として、それぞれにすっかり大人になって、自分の道を歩ゆんでいる。

私が子どもが好きなのは、おさない子どもには策がないからである。天衣無縫の生を営んでいるからである。そうした子どもたちに私達はどれぐらい教えられるかわからない。子どもたちは私たちに少しも教えようとはしないが私たちは一緒になって生を楽しむとき、すくなからず教えられる。

川上三太郎君は一人娘をこよなく愛していた。そして近年は二人の孫にハタの見る眼もおかしいほど打ち込んでいる。酒呑みの自由奔放な生活をして来た詩人川上三太郎としては想像も及ばぬほどの溺愛ぶりに見える。これは彼の主宰する「川柳研究」の編集後記をのぞく時、必ず孫のために数行を割愛しているのを見てもわかるであろう。彼も又、子どもに多くを教えられて来た一人であろうと私は見ている。

子どもの純真さは大したものである。そのまますくすくと伸びればそれは偉大な詩人になるであろうが、殆んどの子どもが、世に接触するにしたがって、その純真さを失ってしまう。

子どもの持つ研究心を大人になっても持続することが出来たらそれこそどんな畑であろうとも湯川博士以上の傑物になれる可能性があると思われる。

私は、子どもたちを愛するが、自分の子どもを溺愛したことはなかった。これは私の子どもたちもよく知っているようである。私も一人の孫を愛するがこれも溺愛はしないつもりである。溺愛はその子どもや、孫を徒らにおもちゃ扱いにするに過ぎない。

私は自分の子どもを、自分のワクに入れて育てようなどとはもうとう思わなかった。子どもたちは子どもたちの道を自ら求めて歩めばいいのだと思っていた。イヤ、子どもたちに変なワクを作ってやるヒマがあれば、私自身をそだてるために、時間を惜しんで来たのである。

私は今もなお苦悩をつづけているのである。おそらく、これは私の生のある限りのものとなろう。子どもたちや、孫に対して善意の助言すら出来ないことは残念であるが、これは私のわがままと見てゆるしてもらいたい。

こんな私であるから、川柳に対する愛情も「川柳雑誌」の数十年の刊行がせいぜい、パイなのである。私自身の川柳に対する夢はまだまだ遠いと思うと、そうアッサリとは死ねない。

（路郎）

八月号目次

題字……麻生路郎
表紙……野尻弘
夢を抱いて……麻生路郎…（三）
大阪の民俗を語る
麻生路郎・麻生葭乃…（四）
沢田四郎作・山川阿茶
川柳・歳時記……木谷竹荘…（一九）
新川柳鑑賞……麻生路郎…（一六）
前書のないミス……河村日満…（一六）
柳風三国志……東野大八…（一九）
先輩よもっと句を作れ……本多省三…（二九）
源頼家と実朝……富士野鞍馬…（一八）
入賞に感激して……田中狂二…（三三）
優勝楯を頂いて……川村好郎…（三三）
川雑川柳まつり……一三夫・薫風子…（三〇）
「仲よし」を選して……麻生路郎…（三三）
作句上のスランプ……諸家…（二六）
不朽洞の人々……南柳氏の巻…（三九）
社の黒板……（三九）
★
川柳塔……麻生路郎選…（一〇）
同舟近詠……諸家…（一五）
近作柳樽……麻生路郎選 北川春巣選…（二〇）
一路集「押入れ」……丸尾潮花選
「特急」……津田麦太楼選…（三六）（三七）
金泥集……麻生葭乃選…（三五）
各地柳壇……（四〇）
入門講座
私の作句法……後藤梅志…（三四）
岡田夜潮…（三五）
不朽洞会から……（三九）
柳界展望……（三八）
青ペン・赤ペン……（四六）

大阪の民俗を語る

——大阪ことばを川柳的に解剖する

沢田四郎作氏

—語る人々—

近畿民俗学会会長 医学博士 沢田四郎作○

麻生路郎

戸田茂古郎

山川阿茶方

編集局——不二田一三夫

水都祭まだこいさんが居そうなり

路郎

—会場 道頓堀河畔山川医院の階上

編集局—最近商品に言葉に、大阪物が各地に進出して、大阪ブームといわれております。これを民俗学の泰斗沢田四郎作（本社洞友）医博に、本社側から路郎主幹、茂乃女史、古方氏（高校の歴史の先生）阿茶女史（皮ヲ科女医）が、川柳人の立場から大阪ことばを中心に、いろいろお話を拝聴いたしたいと思います。

6月29日6時からとご案内を差上げましたが〃大阪時間〃をフッ飛ばす時間励行派ばかりのおそろいは正に国鉄級だと感心いたしました。サテ、この大阪ことばを流行させたのは東京からではないでしょうか。

路郎——近ごろの大阪弁のブームは、映画や漫才などの影響だと思うが、京、大阪のことばが東京へ進出したのはずっと以前からだと思う。たしか平野屋だったと思うが明治末葉に日比谷へ店を出し、仲居はみな京都から送りつけたものだ。それらの仲居は半年で交替させた。京ことばを売物にしていたのに、東京に半年もいると、東京のことばが自然にはいってきて、純京ことばでなくなるからなんだ。近ごろは東京へ本店を置くという会社や店が多くなった。これは戦争中に、統制経済が布かれ、何をするにもお膝元の東京の方が便利だったからで、東京と大阪と政治圏を二つにしてはという意見が出るのももっともだと思う。

阿茶——東京のほうが商売もあんじょう（うまく）やれるし。東京は九十円のものを百円や言うても売れるからしよい。大阪はAが百円やと言えば、うちは九十円でもって来ますと言う。東京は高いとええ（良い）品物やいうてすぐ売れる。（笑）ぜぜ（金）を使うのが自慢だんねんな。義理やの部屋見舞やのも派手にせんといかんのだっしやろな。

古方——戦前のことですが、円タクの運転手も大阪から来た運転手にはカナワン言うてたそうですな。客が値切ると東京の運転手はべら棒めと、ドアをバタンとしめてしまって空ででも走るが、そこへゆくと大阪から来た運転手は、なんやかや言いながら、うまいこと客を拾ろって行くそうです。東京人は商売にかけても宵越しの金は持たない主義ですかな。

路郎——近ごろではどうか知らぬが、明治時代には、お出入りをよろこぶ風習があった。昼ごろに行けば、出入り商人に食事を提供したものだ。早稲田の大隈侯あたりでは、政治家や商人などの出入りが激しく、毎日三百人位は勝手に食事をしていたそうだ。もっともこれは政治家や実業家の得意先の話であるが、一般でもお出入りといって、出入り商人を可愛がったものだ。そんな訳だからあそこの店が少し値が安いからと言ってその方で買うというようなことはしなかった。注文主のムリを指摘しても、納得がゆけばシャクゼンとして続けて注文をくれる点などは東京のいいところで、東京は商売のしよいところであった。

阿茶——東京の人は気がさっくりしてはりまんねんな。

一三夫—きょうのテーマは東京ブームと違いまんねンけど。（笑）

こいさんのおさつ丁稚が買いにゆき

（茂乃）

御寮さんのお顔を知らぬ御用きき

（阿茶）

阿茶——大阪の御りょんはん（奥様）は、品物を見ンと買いはる。八百屋が品書きを持って来ると女中が取次ぐ、その品がきで物を買いはる肚（はら）の大っけえとこがおまんな、信用してはりまんねんなア。

古方——しぶちん（吝嗇）の人もいまっせ

阿茶——日ごろは爪に灯をともすようなケチなこともありますけど、船場、島ノ内あたりのええし（金持ち）の家へ出入りする商人なんかには、ろくすっぽ（碌に）品物も見ずにパッとお金を遣いはります。その代り商人も堅いでんなア、悪いことせえへん。そやけど日常生活は、御大家（ごたいけ）ほどこまかい（節約）家もおます。例えば高野豆腐を砂糖なしで煮（た）く、そのもみない（不味い）ものをおでしょう（小皿）へポッンと一つ。それに辛い塩のかたまりみたいなおこうこ（漬物）でっしゃろ、食べられへんがな、これが大勢の奉公人ともなれば、米代、副食代だけでもバカにならへん。

古方——私なんか、子どものころには、おかず（惣菜）はぜいたく品のように言われました。

葭乃——そんなことを言っていては栄養失調になるでしょう。

古方——そのくせてんやもの（間食）はあまりぜいたく視しなかったようです。

葭乃——はなしがアベコベですね。

沢田——河内辺の農家では、明治時代にはお粥（かゆ）を召使いに食べさすのに、箸を一本より持たせない所もあった位です。箸二本では漬物がよけいに食べられるからです。（笑）

一三夫——わてら（私達）のようないやしんぼ（食いしんぼ）は、ぎょうさん（沢山）食えんよって、わや（駄目）になってしまいまんなア。

沢田——そこが狙いなんです。（笑）漬物を辛くするということは、醤油を使わせないということです。だから生活改善をすれば、使用人に御飯をうんと食べられるということになるのです。（笑）

阿茶——カロリーもなにもあったもんやあらへん。（笑）

路郎——正月の雑煮（ぞうに）なんかも、おむし（味噌）に大根や木菜ぐらいだから今の人たちにはちょっと食えんだろう。

古方——今でこそ雑煮に魚や肉を入れますが、だいたい野菜だけでしょうね。

葭乃——わたしなんかもすまし（雑煮）に白魚の入ったのを食べたのは結婚して始めて知ったのです。

沢田——昔は、お正月の雑煮は、年一回訪れる祖霊にお供えをして、そのお下りを雑煮（ざつに）にして、神と人と一緒に食べたわけです。

阿茶——うっとこ（私の家）では、八の日にめー（海草）を煮きます。ご承知のようにアレは湯がきますが、その湯がき汁を表へ撒くと、商売が繁昌すると言うげん（縁起）を祝いますねん。ところが雨の日に女中さんがまいてると、あの子阿呆かいな、雨降りに水をまいてるというような顔して通る人があるのでィヤやと言います。（笑）

路郎——昔の船場あたりでは八の日には、めーをおかずにしたものですが、揚げを入れると旨いね、アレは。

阿茶——夏の土用丑のうなぎといい、八の日のめーは海草やし、いろいろ食物に変化をつけ、混食して栄養上のバランスをつけてるわけですな。

路郎——何の日は何を食べるというようなことをきめたのも、毎日の惣菜に時間をつぶさぬことと、多くの使用人を使っている店では経済問題と睨み合わせて出来あがっていたものです。

阿茶——魚のきらいな人が蒲鉾なら食べる結局魚の加工品やもんな、うまいこと出来てる。

路郎——ぼくなんかは逆に、尾道に生れた関係か、あまり加工したものは好まないね魚なんかはそのままの姿のほうがいい。

沢田——東京に私は十年近く住んでいたが食べ物の味が大まかで、樽詰の蛸（たこ）とか、関西のような小さな魚の種類がない——牛肉の味がとても悪く、これこそ田舎料理だと思った。ただひとつ鮪（まぐろ）のトロの味だけが忘れられない。

古方——信長が破竹の勢いで国土平定にかかり、信長ブームをまき起しているころ、敵方の捕虜（ほりょ）に炊事をさせたところ、まずくて食えないので首をハネてしまえと怒った。もう一度やらせてくれと頼む者があって、こんど持ってきたものは非常においしくてご機嫌が直ったという話がありますが、これは始めに調理したのは京都（みやこ）流で、あとのは田舎料理だったのです。これで信長のにん（人）がほぼ察せられるようです。

沢田——初めて東京に出て下谷の「あげだし」の赤だしを食べて、塩からいのでびっくりしたが、うどんの味も醤油ばかりのような味です。

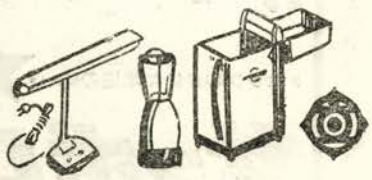
葭乃——濃口の醤油のおつゆ（汁）は見ただけでもまずそうですね。

路郎——関東から東北方面では風土の関係で、濃口の醤油でないと疲労がとれないからね。

沢田——そうですね、どこの国の歴史を見てもそういうことになります。

葭乃——文士仲間でも食べものは大阪がいいと言っています。

沢田——特に東京でまずいのは、牛肉ですね。牛の餌がわるいのでしょう。（笑）私より少し先輩の人々は、まだ桜肉とかいっ

文化生活は電化で…
電気器具は日立製品を

日立全商品特約店
三永電氣株式會社
大阪南区八幡筋堺筋
TEL ㊱ 8040.3221

た馬肉を食べていたそうですが……。

暖簾の元祖は陣幕

古方——私の小学校時代、カタカナの教科書に、ミセノレンカンバンというのがあって、それをミセノ、レンカンバンと読んでしまって困ったことがありました。私はのうれんと教えられていたので、ノウレンならわかったのでしょうが。

沢田——暖簾（のれん）というのは中世期ごろの武士階級が使った陣幕を真似て出来たといわれています。武家が定紋をつけたように、商家ではこれを屋号にした。屋根から吊した陽除けや、チリ除けの幕もヒントは陣幕からで、慶長年間に商家のノレンがひろく行われてきています。

葭乃——シズ（重み）のついたアレは床しい感じがしますね。

沢田——六、七百年前、江戸の商人も暖簾をかけるようになって、その子が分家する時や、雇い人が独立して店を持つ時に、つまり別家するとき、のれんを分けてやる。本家より型をすこし小さくしたらしい。「ああ、あれは、どこの暖簾うちだ」とわかる、つまり信用をバックにしたものなんですね。関東で「店内（たなうち）」関西の「暖簾うち」というは、村落社会で「マキ」とか「カブウチ」というのと同じもので、都会の商家にみる同族団の一種です。

のれんに疵がつくと明治の叱りよう

（光　郎）

嬢はんを射止めてからののれん分け

（高　史）

お家はんの鶴の一声皆だまり

（阿　茶）

古方——御寮はんのひね（老い）たのがお家はんでしょうね。

路郎——親旦那の奥さんをお家はん、又はオエはんと言った。私が明治時代に学校を出て、はじめて就職した会社にオエはんがいられた。その人はごけさんだったが、つまり相当の家の老婦人の呼称なのである。

沢田——万葉時代までの女は、自分の名を他人に知らさない。本名を人に知られるのは肌を見られると同様に嫌ったのです。愛人だけより知らせないのですね。名前を教えることは、征服を意味したようです。そうした名残りは、館（やかた）の名で呼ばれていたものです。「物類呼称」には「妻京にて内儀、大阪にておさん、江戸にてかみさま、甲斐にて中居、播磨や越後でごりょんと記録されています。

路郎——私の学生時代の頃には女性は傘に書いた自分の名を人に見せないようにしたものだ。女性の傘には花子とかいうように名前だけが記されていて姓は書いてなかった。

沢田——「吾妻鏡」にお化けに名前を呼ばれると死ぬという俗信が書いていますが、心理的には、この少女の傘の名をかくす本能的な動作にもこれに通ずるものです。土佐あたりで幼い童の体重の重いのをクソビー・クソベ・クソベナという方言も、わざわざ糞という汚名を使うのも、昔の人の紀の押坂部史毛屎のように、邪視からのがれてすくすく育つようという日本人の人生観の名残りでしょうな。鎌倉の武士で、のちに日向へ移った一族に庁糞というが姓ありますがこれも面白い姓です。

大阪辯つかえば教養ない如く

（一三夫）

路郎——大阪弁は非常に洗練されたことばで、いつも言うようにフランス語に匹敵（ひってき）するものと思っている。

古方——笠置シズ子や浪花千栄子あたりが大阪弁の美しさをこわしているようです。

阿茶——大阪弁も船場あたりのはええけどなア。

路郎——河内などのことばがはいってきて大阪弁をきたなくした。

葭乃——うち行くしィ（私も行きます）とか、そやしィ（そうですわ）などのように語尾にしィをつけるのは色街辺の人達の中によく使われることばですね。

路郎——東京でも山の手と、深川辺ではちがうように、大阪弁といっても船場の言葉と島之内や阿波座の言葉はまるで違っていたものだ。

古方——鳥菊の主人は私の友人ですが、歌が好きでイタリーで学び、むこうでは藤原義江もこの友人の人気には、かなわなかった。江戸弁ではラテン系のことばはさっぱりわややったらしいのです。路郎先生がおっしゃるようにフランス語は大阪弁に似ているというのもこのことでしょう。

一三夫—拙句〝教養ない如く〟を東京の品川陣居氏からおこられましてン。河盛好蔵先生が「大阪弁はインテリの言葉にする可能性は十分にある」と、おっしゃっているにもかかわらず、〝教養ない如く〟とあるギャップはどうしたことか。大阪弁にたいする地元の人の自卑性——と、いうように。

路郎——陣居氏はなかなかの大阪びいきの人なんだよ。

一三夫—また拙句を引き合いに出してすンまへんけど。

大阪で大阪弁が言えぬ席

と、いうのがおまンねん（あります）これはPTAの会合へ行きはったらわかりまっけど、みな東京弁でんが（です）アクセントはねっから（ちょっとも）なってまへんけど。

沢田——東京弁を標準語にしたのがイケなかったのですよ。第一、「ヒ」を「シ」と発音するような人たちの東京弁が標準語ではどうかと思いますね。

路郎——発音の正しいのは四国の土佐の人です。「ズ」と「ヅ」を使い分けますからね。

古方——河内や和泉、それから大和の人は絵画を、はっきり「クワイガ」と、映画を「エイグワア」と言いはります。大阪市内ではもう「カイガ」ですし「エイガ」ですが……。

阿茶——大阪弁は早口やと言う人がありますす。

路郎——省略法が洗練されているから、そう耳にひびくのでしょう。

葭乃——東京弁も早いようですね。

沢田——最近東京から訪ねてきた重役の話に、オフイスガールの窓口は、大阪弁がやわらかいので好評でわざわざ大阪弁を使わしている大会社があるようです。

古方——大阪弁は世界第一級のものです。

頓堀の虹の流れの河岸に住み

（阿　茶）

陽もとっぷり暮れると、道頓堀川から吹いてくる涼風に肌がこころよい。

阿茶女史お心づくしの菓子、果実が卓上をにぎわい。その中に「ビーセン」という東京物のお菓子が、またたく間に減ってしまったもどうり、正に珍味、これ絶佳。

阿茶——大阪にありまへんねん、東京でも小規模でやってるらしく、すぐ売切れてしまいますねン。大阪へのれん分けをせんのでっしゃろな。

沢田——ほう、ビーセンというのですか、いい味をしていますね。これこそのれんの味ですね。のれんといえば縄のれんというのが明治時代、大和の地方にありました。差別待遇のひどかった頃、部落民から金を借りると、この縄のれんを表へ吊るさねばならないのです。どうせ借りる時はせっぱつまって借りるのでしょうが、部落民から借金をしている証拠がこの縄のれんなので世間体を恥じて返済に行くと、代りの買手を見つけぬと金を受取ってくれない。江戸時代の大阪でも、こうした家の大屋根の外面の端に小さな太鼓をつるしたと「浪華百事談巻八」に出ています。

一三夫—一般社会へのレジスタンスですか。

沢田——まあ優越感もあるでしょう。おさえにおさえられた劣等感からくるのですが小太鼓をつるした家が、もし出火でもする時には、部落民が大勢で防火にあたってくれたとのことです。今では、居酒屋に縄のれんをよく使っていますが……。

全員——これはいいお話をしていただきました。

沢田——越後にムシロのれんというのがあって、その家には遊女がいたのです。又、風呂屋の入口も……幕末から明治へかけての話ですがね。

住込んだ当座お倉が気味わるく 丁稚から上つた婿によくつかえ

（阿　茶）

阿茶——昔の船場内の奉公人はつらかったらしいでんな（ですな）番頭が丁稚（でっち）のほうを向くと、丁稚はもう立ち上る姿勢になって、番頭からの命令を待ってます。なんせサンプル一つお客に見てもらうにしても、いちいち倉へ取りに行かなあかん。えらい仕事でんな。

葭乃——それに御飯もお腹いっぱい食べられないでしょうし、今の人はその点楽ですね。労基法などで働く人を守っていますから。

阿茶——そやよって（だから）あも（餅）や、夜泣きうどんなど買うて寝床へもぐり込んでから、音のせんように食べまんねん。

一三夫—こと食べものになると、侠客の家はよろしいな。親分が人の顔さえみたら「めし食たか、まだならめし食え、めし食え」と言ってくれます。

沢田——いつ頃の話です？

一三夫—つい戦争前のことです。そのかわり朝夕は漬物だけです。昼には一銭の天ぷら（今の五円ほどの揚げもの）が五つ皿へ盛ってくれまっさかい栄養失調にもならしまへん。現在の愚連隊はあきまへんが、今日でも一宿一飯の仁義という、映画やお芝居に近いしきたりがおます。腹をよう空らすやつは日に何べん御飯を食べるやらわからしまへん。女中さんの受けのええもん（よい人）は三度三度ぬくめし（温い）ですワ。

おきよどんおかずで敵打つつもり

（阿　茶）

阿茶——東京は朝、大阪は昼に温い御飯をしはりますな。

沢田——農家の人は日に六回ぐらい食べるがお粥ですからね。平安朝時代の貴族は日に二回より食べなかった、招待されて行く

時は、めいめい米や菜を持って行ったものです。

阿茶——戦時中みたいですな。（笑）

沢田——米は貴重品だったわけです。

路郎——疎開をしていた頃、農家で集会があると各自お膳を風呂敷で包んで提げて行き、会がはじまると、お互いに食べものの交換をしたものだが、あれはいいことだ。

一三夫—いつのまにやら又、食べものになりましたな。

葭乃——大阪の食い倒れです。（笑）

阿茶—京都やとべべ（着物）の話やけど

沢田——べべとは女の性器のことです。

古方——びびんちょというのは「貧娼」といって安いお女郎さんのことなんですね。

一三夫—びびんちょ、かいちょと言いますが、あれも女の性器のことですか。

沢田——かいちょはそうです。徳島のちゃこもそうです。男の子が女児をからかうのに「うちの隣りの××やんが、焼餅やきよってチャコやいて、ひげはじゅうじゅうまめはパチパチ」と言う。

一三夫—こどもの頃、小便をして、手にそれが附着（つく）と、びびんちょかいちょと言いながら他のこどもにつけに行きました。つけられた子が鬼になりまんねん。

阿茶……そんな時に、石、金ふんどこと言う。

葭乃——石や金を踏んどくと、それをつけにきても無効になる。（笑）

沢田——昔は石や金もって来いと言ったらしいです。石や金は火打石、つまり火打石で打ち出す火で浄める昔の時代のしきたりが失せた今日ではもう解釈がむずかしくなりました。

阿茶——焼けて泉南になりましたが、女の人が立って小便をしてはるのを見ました。こういう風（ふう）に中腰になって、後部の帯の下あたりの着物をちょいとつまんで、（阿茶女史、立ち上って実演される）用を足すのですが、あれで着物が濡れしまへんやっぱりコツがあるようでんな。（笑）それで済んだら紙も使わず二、三回下半身を振っとくだけや。（笑）これを「三番叟」と言いまんねん。（笑）

一三夫—その女の立ち小便ですが、四国の松山あたりでは、それを〃おたた小便〃と言うてます。〃おたた〃とは〃おとと〃のことで、魚売りの女が、頭に荷台をのせて商売にくるのです。太鼓をたたいてくる**飴売**りをご想像ください。タライのような荷台を頭にのせているため、しゃがんで小便ができまへん。そこでいま阿茶女史が実演されたポーズで用を足します。これをこの地方では〃おたた小便〃と言いまんねんやっぱりこの人たちも紙を使いまへんが、「三番叟」をやったら、荷台の魚がみな落ちてしまいまっしゃろな。（笑）

★

路郎——そうだね、支那（中国）では書館と書くと「女郎屋」のことなんだ。花子は日本では女性の名だが中国では「乞食」のことだから変なものだね。

沢田——支那では「寿器」というと、葬式屋で使う棺桶のことなんです。日本ではおめでたに使うような文字です。

路郎——棺桶なんか生きているうちから買っておく。

沢田——日本人から見ると気味がわるいが居間にでんと棺桶を据えておくことは、親を安心させる孝行の一つなのです。（笑）

沢田——東京の芸妓は一流どこがコロブが大阪の一流どこは堅いそうですね。

阿茶——昔の芸妓は稚気があって面白かった。お馴染みの客があまり来てくれなくなると、お客の家の表札へ吸いだし膏薬をそっと張りに行きまんねん。吸い出してきてもらうようにな。（笑）げん（縁起）がえええそうです。

沢田——マジックですね。（笑）堺ではシャモジで四つ辻に立って客を招いていましたね。

阿茶——「黒髪」を三べん階段で唄うたらええとか、かんざしを投げて、かんざしの落ちたとこから畳の目をかぞえて丁半を占うとか、いろいろあるそうです。

沢田——こうしたものを川柳に詠んだ場合だんだん時代的ズレで句の意味がわからなくなるでしょうね。

路郎——そうです。そのため私はそうした難解の句が、後人をなやますことを思い、以前、本誌に「解題と例句」を書き続けたのです。これからも寸暇を見て、この仕事は続けたいと思っています。

古方——いまの芸妓衆（げいこしゅう）はパーマの上へ島田を冠るのだから、枕を外そうがどんな寝相をしてもよろしいが、昔はへたな寝かたをすると、結いたての髪がわやになりますな。

阿茶——昔は枕の下へ糠（ぬか）をまく、枕をはずすと油のついた髪へ糠がいっぱいつきます。又はカミソリを枕の両側に出しておく。ちょっと動いたら首が切れます、（笑）寝てる間も修業の道はわすれなかったのですな。

一三夫—そろそろスペースもないようになりましたよって、ホンナラこのへんで。お忙しいとこ、おおきに（ありがとうございます）おおきに。

★

織田作の話で更ける水都祭　路郎

思い出の橋ばかりなり水都祭　同

スマートで
着心地のよい
O.S.Kの
レディメード
株式会社 大坂商店
大阪市東区淡路町一丁目二番地
電話東(94)1745・5563番

柳風三國志（1）

――くたぶれてお茶をにごした三国志

東野大八

年々歳々花は咲けども人同じからず、とかく不満不足の多い世の中、一つ好きな三国志を川柳でという気になって、まず暑さしのぎに以下長講一席。

漢の末、汚職権門にはびこってついに世は乱離無章、悪人盗賊雲の如くむらがり起った。

ことのはじめはかん官からで張譲以下十人が政権を私したが、紐帝は暗君。諸事袖の下で高位高官も利権もお望み次第。一寸逆らうことなら家屋敷財産は没収で一門一人残らず叩き切られた。困ったこれら帝の側近を十常侍といった。かん官とは今でいう茶坊主。こんな手合いだから日本の誰かがのたもうた三悪追放なんぞはクソ食え。逆に三悪は天日をおおうて世にバッコした。これでどうにかならなければウソである。

その口火は、終戦直後にショウケツを極めた新興宗教ににている。名づけて黄門の賊。張本は張角、張宝。これが南華老仙というのから邪教を当って大いに勢威をふるい、その兵力五十万にまでなった。なんでもこの南華老仙というのは、荘子だそうだ。終戦直後、荘子ものが日本で流行ったが、いつの世にも乱世の人の世は似たところがあるとみえる。

この賊に責められた幽州で、募兵の札をたてたら、現われ出たのが、これ余人ならず劉玄徳。中山の靖王の末孫で、漢の皇帝の玄孫に当るんだそうだ。この玄徳、わらじをあんで生計をたてていたのが、兵隊になる気になったのだから、よほど食うに困っての身の上だったらしい。中国では好人不当兵という語があるほどで、兵隊になるのはロクでなしという相場になっていた。しかしウソかまことか、この玄徳漢帝の血筋をひくというのだから毛並はいい方である。耳がバカでかくて頭の後で結んでいたという俗説もある。

この玄徳が居酒屋でのんでいると現われたのが身の丈九尺、鳳凰の眼蚕の眉、姓は関、名は羽。中国各地にある日本でいう氏神様級の関帝府の祭神はこの豪傑である。シナ芝居では赤面長髯の武者ぶりでこの人が出ると大向うは拍手喝采である。北京でみた金少山は、赤ピカの大くまどりで、いやはや大した貫禄だった。この二人の対面へ更にもう一人、身の丈八尺、豹の眼につばめのおとがい、姓は張名は飛、あざなは翼徳。三国志の名物男、これぞ燕人張飛である。

三人頷を合せてたちまち意気投合、直ちに義兄弟の盃をあげた。折柄、モモの花がまっさかり、一番乱暴者の張飛が三人中では一番ものもち。その彼の屋敷でのモモ畑の誓いから、これが世にいう三豪傑、桃園の誓いで、英雄豪傑星屑のように現われでた長大無比の風雲録三国志は、この三人の誓いの場から幕あけとなる次第。ときの川柳人はこのプロローグの三人をつぎの様にうたった。

―背中の耳解いて玄徳技にかけ

―酔うたともみえず関羽の赤い顔

―木の根っこひんぬき張飛もいい機嫌

―豪傑も乱世も花はこだわらず

三国志最大の人気スターのこのトリオの前には、創価学会のコーランで押し包んで寄切ろうとしたってそれは無理。黄門の賊と一荒れしてどうやら三人のチーフ玄徳が就職したのは村役場の村長格という地位。ところが、収賄役人の査察官がやってきて、袖の下をよこさなければクビにするとホザク。怒った張飛が、おのれこの野郎と散々ぶちのめし、玄徳も仕方なく其奴の首に辞令の札をブラ下げてスタコラ逐電。

一方、宮中でほ、国父日進が偉張っていたが、これが十常侍に図られて殺されたのを怒った子分の表紹や曹操は、一大クーデーターを起し、一人残らずヒゲのない玉抜き連中のかん官をたたき殺してしまった。この曹操こそ、三国志中の悪玉の総帥で、のちには悪名天下にとどろくが、まだこのころは宮中の小隊長級でペエペエだった。ために、クーデーターを起したが、城外で待機中の、野戦部隊の総司令官董卓にまんまと宮中に乗込まれ、彼を殺し損って生命からから逃げ出した。

この董卓、ヒットラー並のテロとファッショの親分で、勝手に皇帝の首をすえかえたり、気にいらん奴はバッサリ、その上大の助平で他人の女房と自分の女との見境いもつかないという代物。

この無道に怒った丁原が、董賊打倒の兵を起したが頼みの義弟の呂布を、董卓側に寝返りを打たれて落命。この呂布というのがまた大した豪傑で、関羽と張飛と玄徳三人がかりでかかっても根っから参らなかったという、三国志中武力では東の正横綱という男。董卓、この天下一の豪傑を手許にお いてしたい放題の無道三昧。

かくて地方に出た表紹、曹操らが十七カ州の大守を総動員する大連合軍を組織して都へ迫った。しかし数の多い寄合世帯はとかく不如意と相場がきまっている。互いに名と欲と勢力争いがはじまり、いつのまにやらてんでバラバラ、玄徳らも呂布と戦い利あらず、都落ち。

こうしたことで気をよくした董卓先生、ますます図に乗って皇帝と潜称する有様に、司徒王充は一計を案じ、側女貂蟬の献策を容れて、董卓と呂布の仲たがいさせる「連環の計」を用いることにした。

この計とほ、汰魚落雁閉月恥花の貂蟬の容色をもって二人を仲たがいさせ、二人の勢力を消そうという、手取早くいうと美人局（つつもたせ）である。傾城傾国の言葉そのまま、貂蟬ほ、二人に対し腕によりをかけ、ふれれば散らんエロとイットの総攻撃を開始した。ケナゲなこの彼女の手練手管のおいろけの程のよさをながめた川柳につぎの様な句がある。

―貂蟬は　初手董卓へチラとみせ

―チト酔うておつぎは呂布の膝へ乗り

―貂蟬の自信のほどはイヤーンバカ

―ホロホロと牡丹の花と泣いてみせ

最後の詩的な情緒主義もまじえての彼女のおいろけ戦法、果して大豪呂布や狡智の董卓に通じますや否や、まずはお次のくだりをお聞き下さい。

川柳塔

豊中市　戸田古方

真実のこわさが見えぬほど若く
民俗学どこやら性にふれてくる

大阪市　市場没食子

第二次岸内閣成立
改憲に足らぬ数こそもの憂けれ

西宮市　若本多久志

忠告はしいしい酒は酌いでくれ
期待した長男天文学に凝り
黒田節だいぶ苦労もした手付

米子市　三鴨美笑

夏枯と云いつつマダム酌いでくれ
映画なら行っておいでと放り出され

大阪市　正本水客

披露宴に
花嫁も飯替えるほど座が和み

岸第二次内閣
総入歯直す歯医者をかえてみて

豊中市　黒川紫香

鉋屑下見の靴でまた踏まれ
改札へ新聞を置く顔馴染み

大阪市　丸尾潮花

名槍のように鋭い舞い扇

兵庫県　小西無鬼

運勢欄頼りにしてるのを知られ

孫笑う
笑わしてみんなで笑う日が続き

大阪市　西いわを

迫力が足らぬと思う中に惚れ

ホノルル市　内藤草一郎

暇なので見る丈けと云う分譲地
習性がすっと煙草へ摺るマッチ
まだポッとせぬのに割勘酒が切れ
娘の様な年と笑われたりとても

大阪市　大坂形水

レディファスト下の寝台譲りましょう
家族湯へ大阪からの電話です
茨木で腕は上げたが不渡りを出し

東京都　宮田不二

そんなこと有ったかネと偉くなり
通勤車女らしさは云うとれず
先日のお礼が長いのも女

笑い乍ら話せば本当にして呉れず

大阪市　須崎豆秋

立呑みでソースのついた名刺くれ
ブラカード腹の減らないよう歩き
豆腐が好きか君も話せるネ

ホノルル市　羽佐間柳葉

いい齢をしてと努力を侮られ

堺市　吉田圭井堂

気絶しているのに止どめまで刺され
妻も亦ずけずけ返す歳となり

宇部市　国弘半休

一通り躾けて娘見せたがり

岡山県　直原七面山

詩を持たぬ人は嫌いと嘯ぶかれ
人前で小遣ねだる手を覚え

大阪市　西森花村

療養所外の風景聞かされる
定年よ時計の振子はずしたし

鳥取市　河村日満

児が潰れますへ周囲がすこし空き
恋なんかしなかったわとまだだまし

倉敷市　木村千容

私の父ですがなといいそびれ

頑固さは候文をなお捨てず
七十二重役の椅子こそばゆし
我を捨てて唯々諾々の愚妻ぶり
倉敷市　田垣方大

ワイシャツの腕をまくった賞与前
後任は社葬の中で噂され
ねぎ坊主活けて中伝許される
加賀市　野村味平

住みついた場末でいつか気楽にし
責任のやり場をぱちとぼかしとき
大阪市　木村水堂

眼には眼をとは恐ろしいことを云う
労使とも掛値を云うて纏らず
顔知らぬ親類もいる通夜の席
添うてみて噂以上のお人好し
ちり取を呼んでる父の庭箒
高槻市　福田丁路

おみくじの通りに運が向いて来ず
祈禱料足りぬと神はのたまわず
死後の叙勲は辞退もならず
大阪市　真鍋一瓢

花びらの様な唇なり嘘もよき
好きな様にさせと云えるも男親

首つりの足を引っぱる労基法
無くなれば汽車の煙りを恋しがり
スト以来乗ってやらない気が起り
米子市　小西雄々

臨終に間に合うように喪服縫う
退職金スリル楽しむうちに消え
大阪市　吾郷玲人

万才を聴いてるようなケンカする
スクーターの社長後ろへ夫人積む
手の焼ける坊やですとは亭主なり
大阪市　山川阿茶

銀行の利子より高い車代
大阪市　金井文秋

帽子屋も閑なこっちやろノーハット
小松市　伊藤茶仏

上役の一度にあれもこれも云い
古財布みたいかつての名女優
死なれたら妻もいささか打算的
防府市　長野井蛙

鉢巻をすればストかと尋ねられ
非と見てか後続いつの間にか消え
奈良県　尾崎方正

誰が来るのかマダム今日花を活け
加賀市　那谷光郎

後妻はもう要らないと慈父でいる
行かないわ拗ねた切符を裂いてすて
Yシャツの手製役所でほめてくれ
鳥取市　大西八歩

商用を兼ねた花見は遠くで見
旅馴れて後姿の風に似る
大阪市　北川春巣

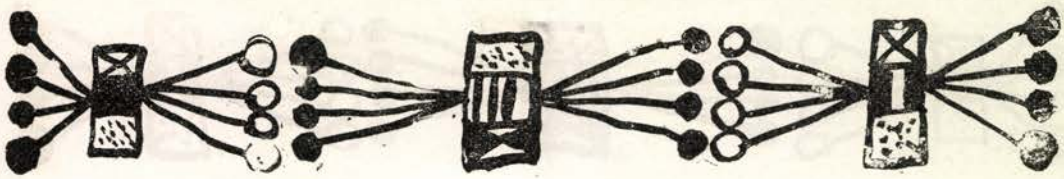
運転免状とろうと斗志衰えず
屋上ビヤホールの開場を見逃がさず
下関市　桜川不水

大阪は二一天作で夜が明ける
稲妻へ遠ざかりゆく旅の人
岡山県　浜田久米雄

夜の大阪遊覧バス（三句）

ネオンの灯大阪はまだもうけてい
大阪のお城が白い灯に染まり
法善寺きれいな人が水を汲み
大阪市　武部香林

門外不出蜘蛛の暮しになり居たり
夏の客畳替えした部屋で待ち
出雲市　尼緑之助



高野山詣

霊場の何か言いたそな墓ばかり
刈萱堂私事を伝えて拝がまれる
鳥取は明けてさぎりの梨畑

大阪市　水谷竹荘

身の上の話も婦人科聞かされる

府中市　弘津柳慶

電気釜それから里帰り多くなり
入試の子が居るのでテレビ買えぬそな

鳥取市　杉谷湖山

頭数だけの一億ゆれにゆれ
盆栽をみなくねらせてうれしがり

西宮市　小沢史葉

旧姓で呼ばれて事務にまだ勤め

尼崎市　小林文月

ボーナスの度にピアノのカタローグ
夏季手当テレビはまたも見送られ

大阪市　冨岡淡舟

水きれた植木の様な定年者
下駄履きでソ連へ行った人も居り
些細なる情けが老いの身にこたえ

呉市　林野甦光

浮気してずけずけ神に頼む事
なけなしの方は話が身に入らず
かりそめの椅子と大臣知とるか

岡山県　福島鉄児

市場籠映画見て来た顔でなし
落ちそうな岩を背にして撮される

岡山県　服部十九平

意外にも妻が反対派に廻り
新妻が夫を三人称で呼び

尼崎市　長谷川三司

憂うつへ女はさらに無口なり
運転手聞けば断然社会党
貧にいてまだ朝夕の茶を選び
就職へ女も英語要るらしく

兵庫県　若林草右

公約を忘れたビラが梅雨に濡れ

豊中市　足立春雄

同年が倒れてからの気の弱り

熊本県　有働芳仙

重態が続く蒲団の派手な柄
口説かれて見たこともなく妻となり
上機嫌酒の肴に子をけなし

広島県　山田季賛

雨よ降れ降れ今夜独酌つづける気

大阪市　山本葉光

ラッシュアワー水むしの足二度踏まれ

倉敷市　水谷谷水

かしこなりましたと馬鹿になっておき
税務吏の身の毛のよだつ日もあろに

倉敷市　椙原一善

いち早く女は初夏を身に付ける
昇給で宴会用の舞ならう

岡山県　田村藤波

老妻のうたた寝咎めまい咎めまい
原稿へ老眼鏡を拭く教授
失恋中ですと妓はまけとらず

岡山県　岡田夜潮

轢死には虚空を掴む暇もなし
落選の憂目に妻も出歩るかず
老人をいたわる形式だけは知り

茨木市　下山清潮

暑さ見込んで氷の店へ金をつぎ
飼主を探してる様な猫に会い

岡山県　本田恵二朗

反対の為の反対種が切れ

京都市　松川杜的

舞扇お庭で鯉の跳ねた音
金屏風他人様が使ってくれるだけ

倉敷市　松村万古

出産へ生れ変った親となり

無駄を省けば色気のない話
尼崎市　藤井春日

学歴が無視されている問屋街
頓堀の月郷愁の湧いて来ず
岡山市　津田麦太楼

ほろ酔へテレビの顔も膨れて居
梅落とす尼の襷のかいがいし
吹田市　橋本幸男

優勝盃母校の門が小さすぎ
準夜勤らしいナースの洗い髪
堺市　高崎雄声

落選も残念会でのむそうな
島根県　藤井明朗

逢うてから愚痴も楽しいもののうち
落ちついて見れば田舎の住み心地
岡山県　永松東岸

工場が出来て淋しい螢狩り
倉敷市　野田素身郎

恋せし人は今この腕の中にあり
たまに左歩けば巡査に咎められ
二流館で貧しき二人満足し
大阪市　清水望峯

妻にまで型の古さを云われ出し
うさ晴らし出来る程でもないポケツ
大阪市　木村十悟

何をして喰べてる街の遊人
四半分着てます女夏になり
大阪市　伊達堰子

淡々と日傭い一票入れて去る
尼崎市　坂田東洋男

オートメ化人間様は油差し
明日辞める机に活けた花一輪
大阪市　不二田一三夫

渋いのどそれはわかるが眠うなり
ああそうが罷り通った流行語
さびしさの塊りだとさ人間は
兵庫県　酒井ひか平

降る様なこの星空に張り込みか
愛妻のポーズ前から後から
宇部市　津秋六花

呑んですぐ寝たが女の気にいらず
デモってからの先生が安く見え
宣伝のただの化粧へ顔を貸し
神戸市　野村初甫

人生の門出の裾を重く引き
爪弾きを猫に聞かせている孤独
桂離宮参観

とび石の真行草を教えられ
岡山県　戸田喜楽

酔っ払い金も名誉ももういらず
長生きを信じて手術台に乗る
唐津市　新岡回天子

夢一つ叶うた妻の洗濯機
金持てば主義も変った票を入れ
岡山県　池田古心

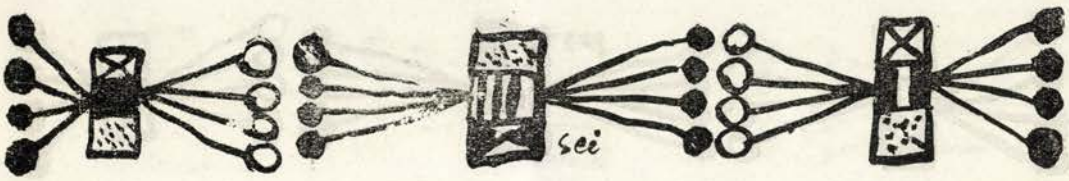
気分だけ二十才に戻る灯を消せど
東京都　石居高志

明け方の汽車は農夫に見送られ
今更に横顔の美を見付けたり
孜々としてうだつ上らぬ椅子に居る
松江市　勝谷山川児

家柄は元大将の額を掲げ
交際費の未払もあり引継書
大阪府　早川清生

秘書に払わせてパトロン画など見ず
小鳥部に小鳥が好きなわけでなく
煙草売ることも社長の思いつき
道ならぬ恋寝たポーズまで気にし
労災を社長グラフで知っただけ
堺市　辻圭水

みちならぬ恋の電話の声小さく
加賀市　中松恒雄



知事専属という運転手の誇り
ハイキングの景色になっている田植
岡山県　野々口美舟

奴隷にも似たのちぞいのおこらない
西宮市　小浜牧人

プロで立つ覚悟運など信じてず
燕巣に帰り駅長水を撒き

御案内仲居揃いの浴衣にて
西宮市　菱田満秋

手切金あっさりくれて未練が出
岡山県　池上知恵美

エンジンが止まれば止る水すまし
ひがむ眼に満月さえもゆがんで見
大阪市　岡部三十郎

味気なくガチャンと押したレジスター
絞首台人間の性は善だった
アベックが通れば鍬の手が休み
大阪市　橘高薫風子

子が生れ妻宝石をもう言わず
子が泣いて縫い目だんだん粗うなり
落選の酒は問答無用なり
鶯の啼く庭に来た執達吏
下関市　中村九呂平

来いと云うから来たまでで策はなく
子のいない夫婦寝巻の色が派手
奈良市　宮口笛生

ずば抜けたきりょうが縁を遠のかし
大阪市　池戸桃村

手を振っただけの愛嬌で票を取り
大阪市　西川晃

御参考までにと反対意見出し
釜ヶ崎風景

刑務所の味も知らんと見下げられ
大悟した姿でくらげ浮いており
外人が証明したという美貌
鳥取県　田中蛙眠子

日舞趣味やけどおたいこよう締めず
お追しょうに笑うてくれた描き黒子
名古屋市　野田一念

尤もな不平に黙れとも云えず
岡山市　林葵丘

電報へ庖丁もったまま出て来
当選へ鯛飛行機に乗って来る
モンタージュなんと刑事によく似てい
神戸市　仲どんたく

事務的にテープではかる事故現場
お屋敷は犬にも挨拶して帰り
平田市　久家代仕男

先生の眼にも好きな子嫌いな子
酔うて言う子の一言が胸を刺し
大阪市　本多省三

聞き馴れたうそも税吏は聞いてやり
旧道はうぐいす丈へ茶屋があり
新市制峠の上は八丁目
終電までねばったのに振られ
大阪市　大谷月都

平凡な夫になって呉れと云う
作品を見る目で花嫁眺められ
岡山市　江国幽谷

流行か知らんがあれで奥さんか
前科十犯ですと押し売り語り出し
フフン君も遂に哲学書の虫か
係長が老眼鏡をもち歩き
インキ壺乾いたままの社長室
岡山市　光好陽子

あの人も給料袋の書き直し
尼崎市　徳永鬼美

戦力のない青空がいやに澄み
残業の帰路ナイターの灯がきつい
西宮市　河相すゝむ

なまじっか情のもろさが社をつぶし
訪ねれば口程にない職の隅

西宮市　野呂鵜汀

高々と塀めぐらして附き合わず

西宮市　樋口舟遊

山脈の名もない花へ初夏の候

新潟県　高野むじな

おこったのおこってないよと恋楽し

マッチつけて呉れもせで女給です

高槻市　辻白溪子

粉薬の方だけ持って旅へ発ち

席あいてアベック並んで掛け直し

高砂市　吉原紅月

差向い鼻の低さをまともに見

亀の子が売れる都会に職がなし

大阪市　岸川漣

おしゃべりが退屈させぬ美容院

大阪市　欄蘭

赤い服犬にも見せる女の子

大阪市　魚住満潮

扇風機の音まで腹の立つ日なり

借金を頼むと社長息をひき

二十年あんたの言葉真にうけて

堺市　田中狂二

明日漫画になる顔揃え認証式

叱ってた親がのり出す子の花火

大阪府　林昌男

我が子もう女になった胸の丘

齢を当てさせてマダムにある若さ

愛媛県　村上旭童

背広きて見てもやっぱり村のボス

何をたく煙か我家見えはじめ

爪をあげて見たが結局逃げる蟹

倉吉市　大前鳴恍

卵産んだ時だけ餌をやる亭主

回復期寝巻の柄が気に入らず

鳥取市　北村三歩

妹も看板娘に仕立てる気

出雲市　原独仙

鯉幟り下はオシメの万国旗

子の日記席を譲った事も書き

青葉若葉家出娘の眼に痛い

同舟近詠

松山市　前田伍健

狂言の台詞楷書でかく如し

須坂市　高峰柳児

新入社今日も謄写版で暮れ

選挙ポス畑は草が茂るまま

老眼をかけて落度をすぐ見つけ

戦後派に負けて選挙区冷たく見

和歌山市　秋月宏方

妻と子の重さよろめいてもおれず

大阪市　石田沐天

此のバーへ化けて出たのかゲイボーイ

こんどめはニューモードなる袋着て

今治市　長野文庫

丁寧に這入って来たは寄附募集

裏口が效いた証拠に蹴落され

楽すぎて何か物足りない小鳥

特技とも云えなくなった写真術

今治市　月原宵明

既成品合う平凡な倖せさ

洋装へお歳が判る坐りだこ

百姓に生れて蠅が苦にならず

ニコヨンの群とゴルフはすれ違い

新児童ヴァイオリン・サークル

講師　麻生アート

奈良県生駒町本町二丁目一〇三番地

生駒教室

TEL306バン

西宮市仁川町五丁目七番地

くるみ幼稚園

TEL638バン甲

★教室新設については新児童ヴァイオリン・サークル生駒教室へ御相談下さい

新川柳鑑賞

麻生路郎

〔五四六〕

少しなら飲んでもという医者に替え　（清生）

人間というものは誰でも、自分の都合のいい方へ解釈したがるものである。その弱点を衝いたのがこの句だ。飲酒家の患者にとっては病が峠を越したとなると少しぐらいなら飲んでもよろしいと云われることは最大の福音なのである。

人間性の弱さをつまみ出して見せてくれているところにこの句の面白さがある。

〔五四七〕

毆打されて父兄皮肉な禮を言い　（夜潮）

うちの子はたたき直さねばモノになりません。ようたたいて下さった。

と父兄は云うが、腹の底では決してそうは思っていないのである。あの教師は怪しからぬ。あんな教師に可愛い子供は安心してあずけられないとフンガイしているのであることを巧みにこの一句に盛り込んでいる。

〔五四八〕

埋立ての好きな役人ばかりなり　（山川児）

端的に叙してはあるが、役人の急所を小気味よく衝いている。

あの池を埋立てたら、何万坪の住宅アパートが出来る、あの海辺を埋立てたら何十万坪の工業地帯の施設がやれるとは役人のアタマである。役人のアタマの限度がこの一句によって判るような気がするのも面白い。

〔五四九〕

当選御禮今から公約忘れます　（春雄）

さて選挙となると、なるべく当選しそうな口約を数限りなく並べ立てるのが立候補者の常である。

その全部が全部の口約をまともに受けとる選挙人もいないであろうが、その幾分でも果してくれたらと其の候補者に一票を入れる。それが積み重なって当選する。そして当選御礼となるが、それを限度に公約を忘れますというのである。皮肉な句である。

〔五五〇〕

ビジネスのように会葬すませて来　（文月）

世の中で多少知られている人は今日は何んとか会社の社長の告別式がある。と三日にあげず会葬する。利害関係の濃淡はあっても別に悲しい訳ではない。俥を走らせて型の如くに葬儀場へゆき型の如くに焼香をすませて帰える。まあ、これですんだという程度であるのを「ビジネスのようが居らない程探し」には「泥かぶらを観て」という前書きが付いておらねばならなかったからである。新制作座の「泥かぶら」は一、〇〇〇回からの上演で、全国を廻っていたので大方の諸兄姉はご存じだろうと思うが、その「泥かぶら」から二十句ほどを得た私は、早速に日本海新聞に十句ほどを発表してもらうと共に「川柳鳥取」その他へ残りの句を投句した。

川柳塔へは、その二十句の中から六、七句を選んで送ったもので、それに前書きがなかったために、幸か不幸かリレー句評に拾いあげられたのではないかと思っている。川雑二月号が到着したとき〝おや前書がないな〟と気付いたのではあるが、平素のずぼら性はそのことをわざわざ問合せもせず

前書きのないミス

——前號のリレー句評へ——

河村日満

七月号のリレー句評に、私の句が提出されていろいろ論ぜられているが、実はこの句には大きなミスが伴っているので、評者の皆さんには勿論、読者の人達にも一と言お詫びをしておきたいと思う。というのは、あの句「人買いを父

暑中御伺

中島生々庵

中島小石

大阪市南区饅谷仲之町二〇番地

に」と観たのである。

〔五五一〕

寫眞向つて一人置いてと無視される　（不二）

これは新聞などを見ていると、よくぶッつかる。大物と大物との間に、それほどでもない人が撮っていると、写真説明の時に、この句のように「一人置いて」と無視されてしまうのである。

自分は斯うした大物といつも交際っているように思わせるために、陣笠代議士などが、とっさに割り込んで撮さられる場合がよくあるが、あわれにも写真説明ではオミットされてしまうのである。こんな句境をつかんだ作者のケイ眼を推奨する。

〔五五二〕

遊説をして見て惡路よくこたえ　（一念）

大臣が地方遊説に出掛けると、下にもおかぬもてなしをうけるが、村から村へ、町から町への遊説で一番こたえるものは俥からふり落されそうな悪道路である。

この悪道路の改修を何とかならんもんでしょうかと持ちかけられて、「イヤ、よくわかった。是非骨を折ろう」と言質をとられるのも、遊説で身にしみたからであろう。

〔五五三〕

嫁かんでもいいわに嫂ちとあわて　（満秋）

小姑というものは、昔からうるさい存在とされているものであるが、戦後、女があまっている時代ではなおさら厄介な存在に違いない。

三十を過ぎるとますます縁遠くなり、どんなとこへでも嫁く気になっても、どんなとこさえなくなるものだ。そうなると、本人もふてくされて、「嫁かんでもいいわ」になるものだ。そうなると嫂の方が、少しあわてるというのである。人情の機微を衝いている。

〔五五四〕

平凡の凡をこつこつ歩かんか　（綠之助）

人生行路はそうラクではない。雨もあり、風もある。社会に揉まれて、悪戦苦闘が続いた人であろう。遂に平凡の凡の生活を思うようになったのである。

急がば廻われで、あせらずにコツコツと歩くことを悟ったのである。その道も又ラクでないかも知れないが……。

〔五五五〕

駅長を出せとなにかが氣に入らず　（久米雄）

汽車の延着か、荷物の遅着か、その原因は判らないが、旅客と駅員とがもめたのであろう。駅員との話がもつれるとなかなか埒があかぬので、旅客は遂にゴウを煮やし、「君では判らぬ。駅長を出せ」と云うのがきまり文句である。そこをうまくとらえたのがこの句。

〔五五六〕

塗下駄の感觸女だけが知り　（千代美）

一寸面白いネライの句である。女性に限られた塗下駄の微妙な感触をとらえてうまく句にまとめたものであるが、その感触は男性にとって、絶体に味えない感触ではないと思うが……。

に放っておいたので、斯様なことになってしまった。私自身が前書きを忘れたのか、投句した途中の句が抜かれたので前書きが落ちたのかは、今以って問い合わせてもいないが、何れにしても前書きがある句であったことをいっておいて皆さんにお詫びしておきたい。

★

河村日満氏へ――毎号原稿は保存してありますので、さっそく調べましたが、前書は付いておりません。それから御投句くださる皆様にお願いしておきたいことは、前書のある句には、×××何句と、句数を書いていただくと清記子が非常に助かりますので、よろしくご協力たまわりとうございます。

―編集局―

川雑不朽洞会員のシンボル!!

美しいバッジが出来ました

スマートなデザインは、キットお気に召すものと自負しております。（1個200円・送料8円）

申込所

大阪市住吉区万代西五丁目二十五番地

川柳雑誌社

（振替口座大阪　75050番）

暑中御伺

西尾　栞

大阪市南区西賑町三〇
電話 75 五九六三番

若本多久志

西宮市津門西口町五〇

川村好郎

大府府泉北郡高石町北四六五

源頼家、實朝

冨士野鞍馬

―頼家―

源頼家は、父頼朝、石橋山の旗挙げの翌々寿永元年（一一八二）政子を母として生れた。建久十年（正治元年）頼朝が死んだ時は十八歳であったが、その後を継ぎ、建仁二年（一二〇二）二十一歳で征夷大将軍になった。

生来、理性に富み、冷静に事を判断する人のようであったが、北条氏との間が円滑でなかった。また病身で神経過敏なとこがあり、日本を二分して、東をその子一幡に譲り、西を弟の千幡（実朝）に譲る計画があった。それで頼家は比企能員と計って、北条氏打倒を企てたが、反って能員は亡ぼされ、頼家は病中を伊豆の修禅寺に幽閉された。そして、その翌年、元久元年（一二〇四）北条氏のために殺され、二十三歳が最後であった。

戯曲「修善寺物語」に書かれている。頼家に関する古川柳は見当らない。

―実朝―

源実朝は、父頼朝が征夷大将軍になった翌月、建久三年（一一九二）八月に生れ、頼家の弟である。幼名を千幡といい、乳母は阿波の局であった。父頼朝の死んだ時は八歳で、兄頼家が幽閉された時は十二歳であった。

建仁三年（一二〇三）十二歳で元服して、実朝と称し、従五位下征夷大将軍となり、その翌年十二月、京都坊門信清の女と結婚した。

それで、妻の感化で、都風の生活を慕うようになり、妻と共に京都から来た人も多く、自然に歌の道に入った。十四歳にはじめて歌を作っている。また、幼少の頃ホウソウをわずらって、その痕がひどく残っていたので人に見られることを厭い、それで武将としてよりも、文学、音楽などを好むようになったのでもある。

十八歳に従三位、二十歳に正三位、二十一歳に従二位、二十二歳に正二位と昇進し、二十五歳には権中納言、左近衛中将となり、二十七歳、建保六年（一二一八）には権大納言、左大将となり、その十月に内大臣、十二月二日には右大臣となった。

翌建保七年一月二十七日、鶴ヶ岡八幡宮で大臣拝賀の式を行い、退出する時、八幡宮の別当であった頼家の子公暁に刺されて、二十八歳を最後として終ったのである。

あっけない右大臣だと政子泣き　（タル九）

と川柳に作られている。

実朝は、はじめ歌を藤原定家に師事したが、後万葉に学んで、家集「金槐集」に多くの名歌を残し、歌人としての功績は大きい。定家選の「百人一首」に

世の中は常にもがもなぎさ漕ぐあまのをぶねの綱手かなしも

という、万葉風の一首が入選している。

これを川柳は、いろいろ評詠して、

百人一首弓箭筋も一人あり　（タル十一、拾四）

「弓箭筋」とは剣難の手相である。

百人のうち一人食ふ初鰹　（タル二三、三一）

鎌倉だから初鰹といっている。

定家郷白歯の右大臣も入れ　（タル四一）

右大臣として京都に居たら歯を黒く染めるのであるが、実朝は歯を染めていなかった。

九十八人はたたみの上で死に　（万安三）

畳の上で死なかったのは、この実朝と唐で死んだ阿倍仲麿の二人である。

また、公暁の隠れていたという銀杏の木を利かせて、

鎌倉志中に隠れた銀杏の葉　（タル一一五）

と、書籍の虫除に挿む銀杏の葉を詠んでいる。

小坪坂実朝公の御生国

光タクシー株式会社
大阪市福島区上福島南三丁目
電話福島 ⑬ 2796 4220 番

宝タクシー株式会社
大阪市福島区今開町二丁目
電話此花 ⑯ 1279 4440 番

川柳歳時記（1）

水谷竹荘

彼の石は実朝公の御奉納　（タル八七）

（タル四〇、五二、六九）

という戯作は、鶴ケ岡にある、女陰の形をした陰石というのがあるので、それに掛けた作である。

実朝を刺した公暁もまたすぐに斬られ、ここで、鎌倉三代は亡びたのである。

鎌倉にも虫はみの星月夜　（タル一四九）

夏の巻

八月は盆である。どこの家庭でも、仏を迎えて先祖代々の霊をお祭りする、又お骨納めやお墓参りするのも盆の行事である。

川柳歳時記は四季折々の催し物や伝説、歌舞伎、名所巡り、季節のうまい料理の作り方などを、川柳を通じて色々と語りつづけて行きたいと思う。その第一回としてお寺参りから始めよう。

川柳と一心寺

無念無想どころかせわし一心寺　葭乃

お骨納めの寺、お骨仏のある寺で有名な一心寺は、この句に読まれている様に、何時お参りしても沢山の人でせわしそうだが、特に、春と秋の彼岸、八月の盆のいそがしさは無念無想にはなりきれない。

お婆さんに限り死にたがり　路郎

人間誰しも老人になると、もういつ死ぬかも知れんと思う様になるが、その中で、ほんとにもう死にたいと言うのはお婆さんの様である。さて一心寺の歴史について語ってみよう、始めこの寺は寿命山観称院一心寺と称しておった、この寺の開山は、源平時代に京都の東山華頂山のふもとにおいて新しく念仏の教をひろめておられた法然上人である。

上人はある日思いたって、我国仏法最初の地といわれる四天王寺にお詣りになって、その時四天王寺の西門から西数丁のところにはるかに大阪湾を見下すあたり、たまたま、雄大な日没の光景をごらんになり思わず合掌して声高らかに南無阿弥陀仏をお称えになった。やがてこの地に四間四面の草庵を造られ荒陵の新別所となづけ、

阿弥陀仏というより外は
津の国の
なにわのこともあしかり
ぬべし

とよまれて以来日想観なるおつとめをこの草庵でつとめられたと伝えられる。日想観とは観無量寿経（かんむりようじゅきょう）に説く念仏修行の一つの方法であるが、この草庵は幸いにも西がひらけ、眺望は遠く海上にひろがり、まことに日想観にふさわしい道場であるところから、後白河法皇もわざわざこの草庵においでになり法然上人と共に、日想観をつとめられたその時のおうたに、

難波潟入りにし日おもながむれば
よしあしともに南無阿弥陀仏

とて今もなお寺に伝えておるがこの法然上人のはじめられた草庵こそは一心寺の始まりである。

無常とや猫も錦魚も死んで見せ　路郎

花替えること気安めの仏の日　葭乃

只今の丸内は豊臣秀吉公の夫人香台院殿から拝領したものといわれ、元和元年五月の大阪夏の陣のときには徳川家康公の本陣になった、当時の住職は本誉存牟（ほんよぞんむ）上人であり、その子仙千代公の弔いには正導師をつとめられ今の一心寺はその時家康公から拝受したものといわれる。

一心寺の墓に隠れて帰る也　葭乃

死んだそうなと簡単に片づける　路郎

存牟上人は境内が戦場になり無名戦士の遺体が累々と横たわっているのを見るに忍びずとし、これをひとところに集めて埋葬し手厚く回向されたがその数三万に達したといわれる。のちにこの不幸な無名戦士の霊をなぐさめるために一つの小さいお堂を建立された、これが戦災で焼失した本堂のはじめである。

なお境内には夏の陣のときの墓がたくさんあるが、その中の一つ本多出雲守のお墓には変った伝説がある。

この墓に参ると酒が飲めなくなると言い伝えられ、今なお日日参拝者が跡をたたない、その御利益を受けておられるということである。

骨仏みな成仏をした人か　葭乃

この一心寺には洋の東西を問わず人種を超越した百数十万人の人骨をもって造立されたお骨仏が安置されている。これは仏教はいうに及ばず神道キリスト教等宗教と信仰をこえ大阪市内はもちろん遠く海外からも納められたお骨を集めてつくられたものである。

そして今もなお年々数万の人のお骨が納められ春と秋のお彼岸や八月のお盆にはそのお骨仏に参拝する人々は日に数十万にも達している、この珍らしいしきたりは嘉永四年頃から初められ、以来十年毎に一度納まった人骨でお骨の仏様を造立安置することになっている。

雑談の前にお布施がさらされる　路郎

古い歴史の一心寺も昭和二十年三月の空襲によって堂塔伽藍のすべてを焼失してしまったが戦災以来年月がたつと共に着々と再興し先年は仮本堂も造り、今回は総欅造りの納骨堂を建立した、これは塔の形を取った大阪では珍しい建物である。

なお一心寺は念仏の元祖法然上人円光大師の二十五霊場の第七番札所にもなっておる。

戯れに死ねばこころやすからん　路郎

親類の顔が揃った一心寺　竹荘

次は秋の巻

近作柳樽

麻生路郎選
北川春巣選

税務署をやめて税務署こわくなり　玉野市　伊原　明林
アベックを見向きもしない英話辞書　同
三面鏡見送ってから又座り　同
改装へ変りばえせぬ客が来る　同
お迎えのまたお迎えが見るテレビ　同
叱られに来たと無沙汰をわびておりシャッターの苦心へ河鹿の声がする　岡山県　太田　蓑流
結婚をしてから詩情湧いて来ず　同
仲人の席へ女房若がえり　同
旅の恥これからかきます濡れタオル　同
酔わぬふりしてて敷居につまづき　同
好きになってからのステップが乱れ　同
あじさいを日傘で抱いて帰って来　大阪市　板東千代美
電蓄を提げて稼ぎの宵を出る　同
三味線を気にして梅雨の窓をしめ　同
浴衣着てネオンの色を着て女　同
単衣帯恋のやつれをしめつける　同
惚れていて女の意地を捨てずいる　同
門限の門へ夜なきが三つ売れ　岸和田市　内藤ささ子
軽蔑の眼差しと知る初対面　同
沿線に見える母校も老けました　同
空色が好き空色を着ずじまい　同
運動神経のにぶい金魚がよく稼ぎ　同
酸素吸入してても見舞へ笑顔みせ　貝塚市　杉本　一鶴
術後室妻の涙の目と出合い　同
婦長以下勤務評定するベッド　同
悩ませた空洞アルコール漬になり　同
さすが奥伝惜しげなく切り活せて行く　同
妻へ謝辞まだ言えぬまま言えぬまま　大阪府　平沢　保美
病んでいてストの鍼切りからのがれ　同
あでやかな笑いキャッシュで取って去に　同
子を呑んだ池からあらわれた螢　同
回復期寝巻の柄を気にしだし　同
花嫁の位置が田植を明くする　兵庫県　永尾　永断
ひたひたと港が夜になった音　同
お遊戯は下手流行歌ならこなし　同
世界的美人メートル法で生み　同
勤評は先ず議員からして欲しく　同
半分に家を仕切って生き別れ　広島県　杉原　愛鳩
腕のたつ妻へなまけるくせがつき　同
不景気を尻目に洋裁増築し　同
サーカスのジンタ青葉の風に乗り　同
若い娘と居れば話題に行詰り　同
昼寝のチャンスに妻気を使い過ぎ　宇部市　上林　粗影

暑中御伺

前田伍健　松山市真砂町二一
月原宵明　今治市泉川通一七八
石田沐天　大阪市阿倍野区阪南町西二ノ三三
長野井蛙　山口県防府市大字西佐波令字幸地一三一六ノ一六
八木摩天郎　堺市九間町東一丁目之口筋
秋月宏方　和歌山市今福東ノ町一二八
唐津虹川柳クラブ　新岡回天子　佐賀県唐津市新与町
仲どんたく　神戸市灘区高羽楠丘一〇一
美津乃屋米浪進之助　大阪市生野局区内中川町三ノ四八

帝化川柳会

帝国化工、大阪工場内
佐野白木谷一平　清水一朗正口辰始　川島葉乙女

帝国化工、大和田分工場内
松下京一楼　深見雅堂　谷沢好祐　井野川甲子朗　兼国艶子

手の甲で泣くとは女の子コマシャクレ　同
初恋の丘は脳病院仮敷地　同
子の同意得て再婚を踏み切り　同
仏壇の花責任を果した様に捨て　同
貧乏性歯医者へ来ても何か編み　岡山市　宗高矢寸志
ニコヨン等帰りに見ても一服し　同
日曜大工へ手を貸したがる男の子　同
月の道映画に酔うたまま帰り　同
電化して姑が達者なのが不便　同
久しぶりどちらも敬語など使い　笠岡市　木山　遠二
瓜の蔓に瓜どの子にも期待せず　同
音立てぬように余生をたのしまん　同
保険屋も胃が悪いとて話込み　同

坂東若芽さんを訪ねて　一句

後髪ひかれる様に山を降り　大阪市　竹内花代子
二階借りエスカレーターがほくなり　同

藤本幸永さんを憶う　二句

パーマかけましたなどと話を聞いたのに　同
想い出は残るあしたもあさっても　同

潮花さん夫妻をお迎えして　一句

嬉しさは女ひとりをまごつかせ　奈良県　坂東　若芽
雨足が初夏の匂いをもって来る　同
又逢える日まで人形を並べかえ　同

藤本幸永さんを悼む　一句

療友は三途の川を越えたころ　同
タイムイズマネーといえぬ給料日　熊本市　田口　麦彦

絶対反対の顔で斗争委員長　同
唇を噛むそれだけのいきどおり　同
友不遇衆議一決のむと決め　同
桜んぼ好みし人の三回忌　豊中市　林　閃男
多数決と言う暴力に敗北し　同
解禁を待ち兼ね庭で竿を振り　同
御見舞に行けば小鳥の講義をし　同
落ちぶれて首輪の良さが邪魔になり　大阪市　広瀬　挽郎
白い眼で更生の道見まもられ　同
特価札絹の手袋ぬぎ捨てる　同
看守をつけて愛の教育　同
母は留守子供は虫と遊んでい　豊中市　石川ひさみ
向き合うたコーヒの味も恋の味　同
やせたとも言うては呉れぬひとにより　同
逢えそうな気もする街へ出かけて見　同
蘊蓄を傾け胃弱同士服み　京都市　都倉　求女
大阪弁で頼み標準語で断られ　同
こんなのが長生きすごいいびきなら　同
眠れない夜汽車真赤な服が邪魔　同
庶民の風避けてる様に門構え　大阪市　米浪進之助
当落は別一票の義理を持ち　同
子供等は今頃夢をサロンの灯　同
既製品のおかずで今日も無事にすま　同
ラッシュの波止めて女の立話　神戸市　傍島　静馬
ビール壜パパが出て売る日曜日　同
りゅうとして行けばそこそこ貸して呉れ　同

南海電氣鉄道株式会社

川柳部一同

明和病院
川柳雑誌社支部
西尾青一路　橘高薫風子
徳永鬼夷　河相すゝむ
野呂鵜汀　樋口舟遊
酒井丹謡　塚田東雲
本城弦月　吉本蕾風
中橋川太郎　奥村善坊
木田留三　林閃男
網本彗星　富永夢路
湯田まこと　寺北知司
御園生すみ江　樋口寿栄
三上芙路　村上球絵
小林まどか　池田文女
事務所西宮市上鳴尾町一三〇
電話西宮④一七六七代
明和病院内

暑中御見舞申上げます
並木会
笠岡市山口

開衿にふれる女の夏の腕　同
金あれば買いたい土地が売り出され　堺市　沢田　美喜
ボーナスへ感謝をされてみな取られ　同
結婚十年角を生やしたままになり　同
同情は断りますと胸を張り　同
聞いてやるだけで年寄満足し　尼崎市　吉本　菁風
惚れて見りゃ荷物になった自尊心　同
平凡は子が財産と言う暮し　同
惜し気なく与え惜し気なく別れ　小松市　関戸宗太郎
上様と書いて不埒な請求書　同
麻雀の負ける極意も教えられ　同
週一度小唄に通う早仕舞　貝塚市　岸本　煙司
親分の自慢は算盤下手なこと　同
倖せで居る表札を見て通り　同
軍鶏に似た姿で叱言云い歩き　大阪市　藤村　梨花
妬きもせず存在無視をされたまま　同
筆冴えて投書夫人と恐れられ　同
拍手するだけに来たようなP・T・A　岸和田市　中野三四郎
進物の魚に困る妻の留守　同
なつかしの歌へ瞼にうかぶ人　同
白壁の土蔵へ親が惚れて嫁き　広島県　平田　越舟
御先祖の墓も建たぬにテレビなど　同
酌もせず飲んで戻れば愚痴をいい　同　米虫一乃字
失業の目に工場の煙がしみ　大阪市　同
父と酌む宵ふるさとの蛙聞く　同
子には子の目的があり貯金する　同
あの方も胸病む噂昼を読む　小松市　位守正柳子

小皺気になるほど妻も貯めていず　同
ホームガーデンその後は草に任せきり　同
失業の身にぼろそうなクイズ聞く　大阪市　国府　玉枝
失業へテレビ百万台を聞き　同

潮花さんへ　一句

優しさと別にあざみの花が好き　同
花活けてもろても交番忙わしない　伊丹市　小川静観堂
よう肥えてと小児科如才なし　同
何かしら腹の立つ日を錦魚死に　同
どっしりとして洋装の線が出ず　和歌山県　木下　一休
恋のほてりを冷房でひやし　同
神の手を振り切って医者へ診せに行き　同
ラッシュラッシュみんな忘れたエチケット　笠岡市　出原　真奇
隆鼻術してから鏡の位置を変え　同
想い出の指輪をはめてみる孤独　同
新婚の話題アパート派手にする　天理市　岡田花奈女
かくし芸だけが取得で招かれる　同
療養の淋しさ化粧などして見　同
連続のドラマが済んで市場籠　大阪府　谷沢　好祐
電圧のドロップ一釜鶏の餌　同
ままごとの台所から電化され　同
贋物もマークに注意せよと書き　貝塚市　小林守株漢
宗教も勧誘されるものと知り　同
熟睡の妻まで憎くなる歯痛　同
貫禄に二級酒ですねと確かめる　若松市　三上　春雄
売った血に恥かしそうなコッペパン　同
養老院明治の良さに愚痴許り　同

暑中御伺

支部

表棚寺ノ内上ル　井ノ下晴芽
仝　井ノ下秀徒
山科勧修寺畔　石川よしろ

都京社

深草相深町　大鶴喜由
丹波林業指導所　田中千潮
相国寺畔　田中烏雀
山科西野山　竹松九角

雑誌

仝　川田酉浦　柳本憲一郎

柳川

仝　厨子奥　小林亀一
仝　西野山　平井絵丘
仝　勧修寺　平岩司郎
小山東花池　本儀親生

説諭きくだけの罰則待たされる　笠岡市　高木　桃里
鼻緒まで変る噂の未亡人　同
憧れの都会で母へ泣く手紙　同
ロマンスが降って来そうな朧月　金沢市　山田　圭都
子が五人テレビは安いものと知る　同
競輪を叱り儲けを期待する　同
花と実とドライはっきり割切って　宇部市　神田　豊年
サロンパス肩に働く意地を張り　同
お祭の儲ける人と使う人　同
密輪とは見えぬ豪華な船が着き　姫路市　中田　白李
何となく西瓜畑をほめて過ぎ　同
ハイヒール履かせて見たい尼の顔　同
今月も臨時支出の姪産れ　東京都　菊地　紀久
喧嘩したまんまの顔で電話口　同
花便り添えて無心も云って来る　同
砂もえてウエットな恋もてあまし　氷見市　関　す頭女
レンゲ草恋の初めと云うものは　同
目玉焼のこした母を不思議がり　同
闘士逝く今日ぞ逆う者の無く　愛媛県　鳥井　川鳥
お遍路もアベックもいて四国宿　同
稔一石汗一石の麦を刈る　同
背伸びする棚へ臨月いたわられ　市施市　久米奈良子
錦之助知らぬ迂闊を笑われる　同
手に負えぬ所業目下恋愛中　八代市　永松　道雄
あこがれて狂気じむ娘の歌手志願　同
落書をしてからペンキ塗り始め　岸和田市　西川兵太郎
何の苦もないから風光明媚なり　同

ちょび髭があだ名の種を播いて居る　今治市　越智　義夫
待つ人があって飛石嬉しそう　同
親泣かせ顔にしたてるサングラス　大阪市　安並　十七
子供だけ卑下さすまいとテレビ買い　同
おばあさんがと自分の顔を棚へ上げ　河内長野市　森本黒天子
誘われたバレーへ若さ持って行き　同
事務服が身についた頃嫁く話　京都府　塚脇　笑太
ヤミ米もまだ片付かぬ政治力　同
御意見に逆らったので成功し　山口県　安平次弘道
夕立ちを避けるパチンコ屋で儲け　同
耕耘機へたってしもて牛で鋤き　兵庫県　藤本ゆたか
波の音不安になった島の釣　同
自転車は時代遅れか税も来ず　大阪市　本多　清人
消毒も日曜毎にモデル地区　同
不器用なあやし方だがよく笑い　西宮市　中橋川太郎
ノータイの方が勘定出して去に　同
妹にズボンの寝押しひやかされ　石川県　同村　虹要
すっぱいもん食べたいのよとおどかされ　同
大粒の苺は病める子へ廻し　西宮市　樋口　寿栄
洗濯もぼつぼつ退院近くなり　同
陳情団予算を喰いに又出掛け　愛媛県　槇　水泡
模様替えしたら客筋少し落ち　同
貧しさは言わずコップにバラを活け　大阪市　丸尾花津代
水さしの水はひとりの部屋で飲み　同
おっぱいの時間くるわす子の笑顔　岡山県　杉本たつよ
和解したビールの泡がもりあがり　同
セットしてネオンの波にもまれて来　大阪市　川島葉乙女

川柳雑誌社阿倍野支部

事務所　大阪市阿倍野区旭町2の110電64.2082（木村十悟方）

（ABC順）

伊達　堰子
不二田一三夫
金井　文秋
河井　庸佑
木口　賀峰
菊沢小松園
木村　十悟
松江　梅里
小川　恒明
新川　博也
須崎　豆秋
高駕　亜鈍
辻川　喜仙
山本　葉光

川柳倉敷支部

木村千容
田垣方大
水谷谷水
松村万古
野田素身郎
椙原一善

素うどんで女ばかりの昼がすみ　同
振る中に色ハンカチもある別れ　田辺市　室井八九寸
他人事のように昔を打明ける　同
ききあわせほめておいたと知らせこま　大阪市　吉川悦子
憂うつかときけばジャズをきいてます　同
女房のレジスタンス酒場で気焔上げ　大阪市　西岡洛酔
甘党は特級酒でも悪酔し　同
早乙女の昼餉ずらりと蓑を干し　鳥取県　鈴木村諷子
潤滑油なれば酒屋で売っている　同
ボーナスを当込む宣伝車を連ね　宇部市　鎮浪翠月
働けば食える体をもて余し　同
ダイヤルをジャズへ廻して娘寝る　大阪市　宮内貴代子
行水をすすめておいてビール抜く　同
八ミリへおどけたパパを笑い合い　貝塚市　護川梢月
口だけで散財してる軽患者　同
旅の恥そんな気持がよろめかせ　滋賀県　土守蜻蛉
獲物みな隣へあげて釣が好き　同
朝の音となって不眠症眠る　小松市　江原たつ路
白髪染め艶よく出来た愚痴となり　同
散髪は下手だがテレビ客を呼び　笠岡市　佐内隆文
鼠捕り不得手な猫で金魚とり　同
病床で天気予報を聞きたがり　大洲市　富永建朗
失業をしてから朝寝のくせがつき　同
酒故にスタイリストのタイがずれ　宇部市　平田実男
新しいゴム長雨を待っており　同
百姓をさんざ機械が追いまわし　笠岡市　谷本鈍愚坊
二人して夢を追うてる家具売場　同
落選をしたそのビラへバスの泥　熊本県　淵川秀敏

混む井戸に男も並ぶキャンプ村　同
ワンピース廃物利用とは見えず　児島市　伊丹柳瓢子
想い出のパラソル派手な柄になり　同
真面目とはパチンコしてる時の顔　西宮市　網元彗星
感覚の相違と議長とりあわず　同
カビ臭い蒲団を詫びて泊らせる　大阪市　宮原敏子
理窟云う子に親馬鹿が頼り出し　同
電話口いつまで待たすオルゴール　大阪市　松谷丑松
若い人パチリですます陽明門　同
ほめられた髪半日も待ちました　西宮市　富永夢路
鼻の下長ううつしてコンパクト　同
長旅はニンニク臭いのと座り　出雲市　山本朱紅
エキストラカメラ気にして叱られる　同
美麗なる刺繍の裏に似た女　津島市　堀田淳一
美を追って整形外科で身を削り　同
退社時が近づき俄然ペンを取り　加賀市　斎藤巌
慰安会つばめ返しのスト予告　同
ネクタイは初夏へ素直なゆれを見せ　今治市　越智一水
旧姓で呼ばれ嬉しい人に逢い　同
此のおれを駄々子にして舵を取り　鳥取市　岩田八文銭
父の日追加の一本つけてある　同
店員の好みそのまま買って行き　西宮市　村上球絵
衙録へ番傘さした足を止め　同
のんびりと田植見ている昼の月　愛媛県　藤田博人
化粧室もうビジネスでない笑顔　同
思案まだ残る小窓へ遠花火　倉敷市　小倉美音子
頑固だが情にもろいので好かれ　同
五千円札くずせば欲しいものばかり　松江市　岡崎祥月

暑中御伺

冨士野鞍馬　京都市東山区清水四ノ一七一
阿部佐保蘭　東京都中野区鷺宮一ノ八四
橋本緑雨　大阪市東住吉区平野西ノ町八三
川端鬼酔　大阪府南河内郡南大阪町軽里電古市一二二
大西迷窓　高知市追手筋五七入交衛生試験所

川雑出雲支部
尼緑之助　出雲市高松
上野錦水　石川県小松市本折町
菊川泰平楽　門司市庄司町七丁目
川竹松風　高知市追手筋五五湖月
久家代仕男　島根県平田市灘分町一、八二二
黄瀬美秋　滋賀県水口町貴生川局区内三本柳
中西兼治郎　大阪市大正区三軒家市場通一丁目七四

クーポン券真綿で首をしめるなり　同
病んで寝て妻のお粥の有難し　黄面市　岡島　孤舟
童心にかえりお多福風邪も引き　同　山本　一傘
金持てば苦労して来た様に云い　西宮市　同
月給をもろたんやろと遊びに来　同
テレビ喫茶ナイターまでも見ようとり　大阪市　中谷ハナ子
本職がどれか肩書多すぎる　同
裸でと云った支度を競べられ　小松市　筒井　吉枝
珍客を泥手でねぎろう五月晴　同
あとはもう医師を信じて台にのり　大阪市　半田　夏生
片肺に生きる希望の息を吸い　同
重労の後を番茶でねぎらわれ　玉野市　小谷　仙山
PTA教師をこばむピケを張り　兵庫県　齋藤たけお
茶の汗を流して登る滝のみち　大阪市　井石　悟朗
趣味持たぬ顔して貸間借るつらさ　小松市　矢治　香径
衣摺れに居ずまい直す片思い　岡山県　鳥取　周甫
泥足で投票にゆく忙わしなさ　兵庫県　河原みのる
強情で蚊のなく様にすんまへん　大阪市　芳井　昭子
お食事は抜いてもパフは手放さず　山口県　原田　綾女
肩書の手前一本さげて来る　大阪市　河井　庸佑
境内に小麦を干した農繁期　笠岡市　松本　忠三
色糸に乗せて年貢の程が知れ　西宮市　酒井　丹謡
真心をこめておみくじ料払う　神戸市　小池　鯉一
ふるさとに螢も飛ばぬ世となりぬ　岡山県　楢原　万女
だまされてあげる倖せ知っている　大阪市　別所　灯子
待ち呆けだからパチンコにもとられ　大阪市　山口　白峰
里帰り庖丁三日の錆が附き　小松市　万仲　一進
議員バッジつけたが最後そりかえり　福岡市　本村珍ちく
好きな人好きと日記にだけは書き　大阪市　堤　勝三
公認の恋相乗りで来る職場　伊丹市　西沢　堅持
職業が人を変えるか靴磨き　奈良県　木村よしを
未亡人だから浴衣に気を使い　鳥取県　土江　洋々
失礼にならぬ程度で念を押し　金沢市　桐谷　紋六
耕耘機使うに田んぼが小さ過ぎ　岡山県　横山　一声
ナメクジの様にしぼんで夏を越し　和歌山県　山下　光男
税務署の強気へ妻の千日手　玉島市　秀川　承平
自殺する覚悟の家出傘を持ち　西宮市　塚田　東雲
文学へ挑む若さのベレー帽　大阪市　保田　華甫
ブルジョアの様な好みの女事務　西宮市　三上　芙路
失恋へビルは無情にそそり立ち　大阪市　村田　肇
もう故障やっぱり月賦のせいにする　大阪市　中西兼治郎
袂から鬼面も出る秋祭　玉島市　井上　清心
落選無念のやり場妻にあてハワイ　宮政　周防
パトロンの好みで夏を和服着る　西宮市　御園生澄江
大学出美名の伴まだ食えず　石川県　高瀬　幸路
改善のプラン結局台所　七尾市　松高　秀三
どの顔も自信ありそうなミス候補　西宮市　石井久美女
しみじみと金の御恩を知って病み　広島県　山内　俊見
内股外股親娘のバドミントン　長野県　増本　夢人
縁談がきまり稽古をちとさぼり　高知県　須藤　俊江
解禁へつづく夜道が白く浮き　小松市　上野　錦水
憂うつな頬杖職場の倦怠期　大阪府　井上美恵子
女房の愚痴聞き取れぬ忙しさ　愛媛県　河本南牛子
線ばかり引いて相場に手が出せず　須崎市　高橋　蟠蛇

川雑八代支部
佐野　卜占
田村　藤波
岡山県英田郡美作町湯郷
安平　次弘道
山口県美禰市大嶺町平原坂

川柳雑誌社
にしなり支部
土井　文蝶
吾郷　玲人
本多　省三
魚住　満潮
石倉　旅風
岸川　蓮蘭
欄多　清人
本山　下青波
芝田　淡海
中田　五色
井石　悟朗
麻生　利幸
糸山　愛子
宮原　敏子
岡田　歌子
大角　麻佐江
西川　晃
後藤　梅志
大阪市西成区玉出新町一の一一

作句上のスランプ

・アンケート・

1 作句上スランプを感じたことがありますか
2 あるとしたら、どうして克服されましたか
3 スランプを意識しない人は、その作句生活の一端を、おきかせください

スランプ開眼

須崎豆秋

ちょいちょいスランプがありましたが、これは尺取虫が前進するために屈む姿と同じで、これによってこそ川柳も前進するのであって、スランプは前進の一課程であるという信念をもって居りますので、スランプに陥ちても一向平気で、その間は気楽に映画でも観て待機することにして居りました。

ところが、終戦の頃に私の川柳観に雲がかかって、二カ年位作句が中絶したことがあり、その間、詩、短歌、俳句等を読破し乍ら過ごして居りましたが、フト春の日に表てを通る研ぎ屋の声を聞いて

春うららはさみほうちょうかみそり研ぎ

という一句を得て、川柳はこれでいいんだ、「素を平板に」の一語に尽きるという確信を深かめ、スーッと夜が明けたような気持ちになり、完全に川柳へ還って以来、健康な状態で今日に及んで居ります。

★

戸田古方

①あります。

②克服というよりはとけこんでしまうのでしょう、川柳二千六百年前後は正に第一回目、しかし作品が本になる頃はぽつぽつもどって来ました。

（多読）句を読むことによって技巧を、ひろく見聞することによって句想をゆたかに出来たように思います。

（多考）個性の形成もその間に出来てくるのでしょう。川柳革命。川柳の壁を真の意味で突き破ることもくるしみなしにはできぬことです。

（多作）ヘリコプターみたいな上昇でなくやはり滑走しなければなりません。

抜け出られそうなスランプから未来永劫のスランプに入ったような日頃。川柳経営が川柳作句の邪魔をしているようにも思えて、いつまでもゼロの虚心で作句したいものです。

★

正本水客

〃水客さんは川柳の引きだしだ〃とほめたような貶したような批評を誰かがしていられたが、その引出、近頃は何か詰ってしまって開きにくくなった、これがスランプであるかも知れない。日々、時々、心の持ち方により環境により、句の作れるとき、作れないときがあるのは勿論であるが、作句を始めて以来、これがスランプだと特に感じた時期は私にはなかったように思う。これは性格も作風も、それぞれに異る紫香、潮花という良きトリオがあって互いに助けあい、刺激しあってきた賜ではなかろうか。

句が人間陶冶の過程であるとすれば、時に伸び縮みがあるのは当然、縮んだときに、これを大事に育ててゆく心構えが大切なんだと思う。

知らぬ間に克服

若本多久志

神経衰弱を患ったことのある方はお解りになるだろうが、あのどうにもならない焦慮感と、癒りたいという様な気持が起らない虚脱感。それに似た作句上の一過程。それをスランプと名付けるならば、克服しようなどという努力によって、レギュラーな状態に復帰したと高言出来る人は少ないのではなかろうか。私の川柳に対する懐疑期は、入門三年目から初まって、五六年間、それは丁度悪夢の様な太平洋戦争の最中から、敗戦後の混乱期まで続いた。当時

我醜の御盾となって今日征かん

神代から戦陣訓のある日本

こんな標語川柳に血道を挙げて居た川柳人の中で、私に川柳の手ほどきをしてくれた、安川久留実（金沢市）は

三毛猫の鈴がなってるいい暮し

などと、私の家へ来て、酒（と言っても、ぶどうの絞り汁）に浸り

ながら、盛んに古川柳の研究を奨めてくれた。

そして彼の蔵書で、川柳江戸砂子（上下）や、誹風柳樽全集、川柳吉原志、それに岡田博士の、寛政の改革と柳樽の改版、等々、次から次へ、私が耽心して入手したアルコールや、葡萄酒と交換され、書斎に積み上げていった。最初は読んでみようとも思わなかったのに、いつの間には、頁を繰ってる裡に面白くなり、遂々古句の研究に没入する様になった次第。

言うなればこれが、自然に私のスランプ時代を克服した事になり、昭和二十二年、初めて路郎師にお目に掛って、再び作句欲をかき立てられ、今日に及んだ訳である。

私の作句態度

木村千容

私は性来寡作型なので、作句上スランプを感じたことはないようで、謂うなれば年中スランプなのかも知れない。年中がスランプではスランプも意識しない、ことに最近は、ズボラして何所の句会へも出ない故句会のスリルさえ忘れている。という不熱心の極みで、お叱りを受けるかも知れぬ。従って克服という訳ではないが、一日に一句以上位は必ずと、我れとわが心に誓い、句帳はポケットに就寝の枕頭にはメモの用意を忘れませぬ之れは出来ても出来なくても日常の習慣化で、時には数日句帳をよごさないときもあるが、大体月に四五十句は句帳にとめていて、この内から自選して川柳塔に投句（課題吟はよほど気が向かないと作句しない）して、自分の意を果した気持で自慰し一と月を終ります。川柳家としては実に下の下で寧ろ鑑賞家に属するのではないでしょうか。

熱度の問題

尼絲之助

スランプは勿論ありますが、波が小さいので悩むと言ったことはなかったようです。

作句上のスランプということはよく聞くことですが、これは川柳愛の熱度の問題だと思っています。

スランプを意識しないというほどの川柳人ではありませんが、情熱の燃焼が少ない時は、やはり句の精彩を欠いていることになります。平凡とマンネリズムが同居するので、そんな句ばかり出来る時は私の生活にハリがないことでしょう。気魄の衰えに対して腹立しい思いは時にあります。

川柳即生活―を信条にして来ている私には句は生活への反省になります。

イキのいい川柳を作りたい

悔なき生活を続けたい―これが作句上の併行線である念願であります。

★

田垣方大

一、あります。

二、スランプにも重症と軽症があると思います。重症は長期間深刻におそってくるもので、一ヵ月以上も全然作句出来ない状態です、そんな時無理に作句しようとしたら、他人のよい句ばかり浮んできて益々深淵に落ちこんでしまいます。ではどうしてそれから脱却したかと申しますと、柳友を無理に引張ってきて柳談をかわすとか、小旅行をするというように、型にはまった日常生活に変化を与えることにしています、そうすると柳談中に灯がともるように一句浮んできたり、ローカル線の中での人々の動きや又話振りの中に、ニヤリとするようなヒントを掴むことが出来るからです、一度詩嚢の紐がゆるんでしまうと後は楽なものです軽症は昨日は全然作句出来なかったのに今日は面白いように作句出来るというように連（サザナミ）の如き小さな起伏のある状態ですが、これは勉強―していない証拠です。こういう時は川柳雑誌を読めばたちまち行き詰りは雲散霧消します。要するに健康に留意しているとある程度の病気は防止出来るように、川柳も絶えざる努力によってスランプは防げるのではないかと最近信じています。

★

土井文蝶

スランプなんて意識した事おまへんな、わたいらみたいに何十年も川柳に接してましたら、いつ頃スランプやったんか句会なんかで特に作れなんだ言う事もおまへなんだ。

そら雑吟は出してまへんけど、これは怠けてまんねんで、自分でも判ってます、もっと勉強せなあかんな思もてます頼んまっせ。考えて見たらスランプて、ええ言葉だんな。

友達と句会へ行きまっしゃろ、帰りにお前何句抜けてん聞いたら、今日は調子良かったんで五句入選や言うて鼻高々やわ。自分は一句しか抜けなんでみなはれ、それこそ阿呆らしゅうて、アホらしゅうて仕様おまへんやろ。その時このスランプ使いまんね、僕此の頃スランプやで片がつきまっしゃろ。友達かて同情しまんがな、結局負け惜しみだんな、これ川柳やさかいよろしおまんねんで巡査がスランプや言うて泥棒見ても捕まえんは、機関士がスランプや言うて停車駅に停めなんだり、うちの嫁はんがスランプや言うて飯のこげたん許っかり食わされたら上ったりだっせ。そやけどこんなんは大歓迎だんな、銀行員がスランプで五千円札仰山呉れたり、税務署のスランプで税金取りに来なんだり、こんな事おまへんやろか。

★

西森花村

1　年来の睡眠不足。石のようにしびれた頭では中々着想処ではない。頭脳の回転もスローモーで、句会に行けば帰ってから、投句は〆切日すんでからメイ句が浮ぶ有様で、其のメイ句も物臭で控えもせず何日か忘れてしまうもっとも忘れてしまうような句にロクな句はないそうだから、結局釣りおとした魚の類いにすぎない。現状はスランプです。

2　まだスランプに効く薬を飲んでおりませんので。

3　但し、スランプなどと言うと一人前みたいな口振りだが、好調の時があったかと聞かれると答に

ヒゲソリ後に
アストリンゼンは世界的常識！
1 生々した男性美をつくる
2 爽快でヒゲソリがたのしい
3 新強力殺菌剤G11配合で一層強力！
明色アストリンゼン
桃谷順天館

窮する。スランプといえばスランプだが此れは自分の地金に過ぎないのではないか。だとすればじたばたしてもはじまらない。自分のペースで進むだけである。それよりも意識しないスランプ。マンネリズムに陥って安易な作句態度になるのを警戒しています。本当は現状では作句よりも、新らしい有能な人の句を見るのが一番楽しい。

★

国弘半休

川柳を始めて二十七八年になる私にはスランプも一度や二度ではない。今になって顧ればその都度川柳に対する理解を深めたと言える。競技に専念する選手が自己の記録を向上しようと努力するときスランプを意識するものらしいがその都度幾らか記録も良くなるものであるとか？　併し私の場合は川柳の作句技術がその都度向上したのではないので作句上手にはなれなかった。何年経っても平易なすらすらっと出る句しか作れない。おそらくこれが私の性格で今後もこの状態がつづくと思っている。従ってスランプも強く意識しないし人一倍克服しようと努力もしない。私の努力は人間完成への努力である。私が労働問題の六カ敷しい西宇部のマスターに就任した時某新聞は評して「現場に自信を持っている」と書いていたがそんなこと自惚れて口外したこともないのに他人の眼は鋭いものである。川柳に対する態度もこれと変らない心算でいる。

★

山川阿茶

①スランプをスランプと意識してないのかもわかりません。但し、皆様に感心して頂ける句の出来ない事がスランプならば年中スランプとも言えましょうが今まで何にも出て来ないで困ったと言う事はありません。

②麻疹の様に一度は経過するものなら、その時は笑われてもいいからどんな句でも作って作って読んで読んで川柳と取りくんでゆくつもりです。

③柳歴の短い私などは初めからいい句などと考えると萎縮して何も出て来ませんので何んでもかまわず自由に伸び伸びと書いておいて後でセレクションします。生々庵氏から「輪転機」と言うニックネームを頂く程作るのですが、結局いい句がなければ作らぬのと同じ事にもなりますが一つの事柄を自分から相手から三人者から見た場合と言う風に多方面から見たり考えたりして句をまとめる様にしています。なるべく見たり聞いたり読む機会を多く作る様に心掛けております。

★

水谷谷水

1　再々のことで昨今は余り拘らぬことにしています。

2　肩の凝らぬ雑誌か子供達のマンガの本を見ることにしています又好きな句が控えてある句帳の作品を鑑賞する方法もとっています、スランプのようなときにでも感銘を与えてくれる作品は名作と言えるでしょう。このような作品を句帳から拾い十分に味い私のものになるまで研究することにしています。

因に

三年ほど前までは機会ある毎柳友とどなたかの作品を選び論争をしたものです。

スランプの抹殺には実に効果がありましたしこうして熱弁をふるったあとの二、三日というものは、面白いほど句想が生れることもしばしばありましたから

★

後藤梅志

1　あるような。ないような。

2　意識しません。

3　スランプは習慣暗示のようなものですから、迷いが一ばんいけません。

一、恐いものは居ませんが、馬鹿にできるものは一人も居ないと思っています。

二、ふだん用事をためません。

三、たのしく作句し。強いていい句を作ろうとしません。

いつの頃からかそんな習慣がつきました。

★

津田麥太楼

1　スランプは別に感じませんが、多作のわたくしには句数の制限に気落ちがしているのです。せめて樽並にならないものかと。

2「こくふく」の苦心はいたしませんが、老境で伸びる見込みもありません。

3　作句生活は極めて平凡。本社の雑誌は克明に味読します。殊に塔と樽の雑詠はあらゆる角度から玩味します。入選句の一つ一つから色々な連想を呼びメモします。時にはとてつもない飛躍したテーマと素材を把握します。模倣剽窃に陥入ってはなりません。一応句にまとめて抽斗へ放り込んで、ほけの冷めたところを出して再読吟味します。凡そ半数以上は見冷めして自惚れの強さにあきれます。さて、文字通り推したり敲いたり突き放して転がして些かでも枯淡さと含蓄に苦心するのですが、先生の御柵眼にかかっては、いやはや年甲斐もなくお恥しい次第です。

★

椙原一善

麻生路郎先生著

川柳とは何か

—川柳の作り方と味い方—

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたもろもろが十七音に圧搾された諷刺と諧謔の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新的であるその川柳がいかにして発生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味わい方は——以上を最も明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。

送価　二五〇円　三二〇円

取次所　川柳雑誌社

至文堂

東京都新宿区払方町27　振替東京29507

スランプへの抵抗

永松東岸

（1）

私は新境地を探究しようと思うとかならず、スランプになる。これが真のスランプかどうか私には疑問であるこれがスランプなれば。

（2）

スランプも、私程度の、スランプなら、たいした問題ではない。だいたい、スランプとは、その人々の精神作用で作り出すのではなかろうか。と、私は思う。だから、スランプと感じた時は出来るだけ、スランプ、と意識せず、しゃに、むに作句する。大いに、柳談やる、等々。そうしているうちにいつの間にか、スランプは克服されている。

だから最近はあまりスランプは感じない。だが真のスランプとはこんなまやさしいものではあるまいと思っている。いずれは大きな壁に突き当る時が来ると思う。その時は、いかにするか今から心している。

作句上の悩みそれはどなたにもあることであろう。それは千篇一律の句を作りたくないからであり句の向上を願っているからであるが、その悩みが深い程作句出来難くそれをスランプと呼ぶならばスランプは一生続くであろう。が単に句が出来ないと言うのは、そうした悩みを自覚していないか怠けている訳であろう。どうしても作句への情熱が湧かず作句出来ない事はあるがその原因ははっきりしている。私の作句法は単純である一、健康に留意する事　二、世事にくよくよしない事　三、スランプであるとの意識を持たない事、以上が私の信条である。常に川柳書を読んでたのしむ事は勿論であるが又、年輩の方々の話を興味深く聞く事が私は好きである話するより聞いている方が楽しい、その話の中にその人の哲学があるからでありそれが私の作句法の一助となります。ズバリと言えば以上が私のスランプへのレジスタンスであり対処法であります。

身体の調子

眞鍋一瓢

いつだったか潮花氏に「今頃句が下手になったなあ」と言われた事があったが、スランプと言えば、そんな時かも知れないが、私自身何も感じていないんだから、スランプ克服なんて言葉は生れ様がない。良かろうと悪かろうと毎日紙切れなり手帳なり手近なものに書きつけて置く、そんなズボラな句稿だから時々失うこともあるが別に惜しいと思わず、毎日一句でも二句でも書き止めて居る、言わば私に取って、一種の新陳代謝であり、生理的排泄物の如くとも言う作句態度から、悪いのは当り前だしまぐれ当りには物になる事もあったりする。要するに川柳の出来ない日は、身体の調子の狂った日で、便通がないのと同じ生理状態であるのかも知れない。課題吟の好かない訳もここにあるらしい。何と言っても課題に束縛されるのは、負担を感じる事であり、普通の生理状態へ下剤まで用いる必要はないんじゃないかと考えている。

★★★★★

先輩よ もっと 句を作れ

新しい雑誌を開けて見て、先輩大家の句数の少い事は淋しい事である。毎月の雑誌が、唯一の教科書であり参考書であり又指導書でもあるからである。私も今、七面山氏の所謂川柳の壁らしいものにつき当っているらしい。先輩の佳吟名句に接する時に、僅かながらも、この壁を突き破ろうとする意欲にかりたてられる。柳話を何回も聞かせて貰うよりほ、一句でも多く名句を見せて欲しい、何時までも何々し「されて居り」が何だか懐疑的になり、是でよいのかしらんと思う。斯んな時に、新らしい川柳は斯う作るのだ、斯うあるべきだと思わず三歎ひざを叩かす様な句に接したい。今の私は句を作るよりは、いい句を見たい欲望につかれている。一体本誌の句数特に大家先輩の作品が他の雑誌に比べて少い様に思うが如何であろう。もっともっと御自身の為にも、私共後につづく者の為にもどんどん作って戴き度い自分を追い越す様ないい作品の少い事に淋しさを感じられるのは、路郎先生のみではないと思う。大先輩よ断じて芸惜しみをなさらん様に。

先輩が大物すぎて頼りなし

（進歩）

本多省三

コーヒの味

モダン川柳

心斎橋大丸北の辻東へ

御門

TEL ㉗ 6684

御集会には階上御利用下さい

暑中御伺

南区医師会文化部

杏林川柳会

（イロハ順）

岩崎一仲
大島葭明
河村瑞川
中島生々庵
中島小石
牟田一哲
海野比呂史
安岡珊枝郎
山川阿茶
平尾太希志

雑川

岡山支部

林江光宗津
国好高田
陽幽葵矢麦
丘谷子志楼太寸

岡山市電報局内

柳話をされる路郎先生

一年一度の夢の柳宴

1958年度の路郎賞に挑む

雑川 川柳まつり

——優勝楯の栄冠、田中狂二氏に輝く

柳界の話題をさらう、わが川柳雑誌社主催の川柳まつりは、本年も光明寺の大広間をブッ通して、7月6日正午から、華やかに、ごやかに開催された。

われらの恩師の誕生日をお祝いする門下生をはじめ、孫弟子曾孫弟子が、ほとんど全快された路郎先生に「おめでとうございます」を浴びせかける。

「ありがとう、ありがとう」と、先生の慈眼に時おり光るものがあった。

司会の西尾栞不朽洞会理事長、司会とは雑誌の目次のようなものだとウマイこと、おっしゃる。先生のご健康を祝って、中島生々庵副主幹を紹介される。門下を代表して挨拶される氏は、社運ますます栄え、誌運いよいよ快調をよろこばれ、葭乃女史の愛の力は友の会これまた日に月に伸び、路郎先生の喜寿、金婚式、米寿のお祝いを皆様と共にお待ちしましょうと結ばれた。

拍手一ときわ満場にとどろく中を、われらが父、麻生路郎先生が登壇される。

昨年秋ご発病された当時の筆記問答の悲喜劇を、きょうここでユーモアたっぷりに話され、それをまたわれわれが笑顔で拝聴できることは、なんというありがたいことか。

3時30分——席題四題が披講さる。木大会初の女流選者として、内藤きさ子さんがソプラノで披講されたのも、川柳まつりにふさわしいものがあった。美しい紅ちょうちんがきょうは女性的にさえ見えるのである。

席題が終ると、第二部にはいる。北川春巣編集局長が「長生きと川柳」と題され、氏の専門である医学上からみた「日本人のある年令に達する生存者数」から、「人間の寿命を定める要素」等々を、配布されたプリントを手にした会場の人々は、興味深く氏の熱弁に耳をかたむけるのであった。

待望の「仲よし」が路郎先生によって発表され、別項のように田中狂二氏が本年度のミスター・川雑となられた。

山川阿茶さんは、五月の婦人友の会に優勝した余勢をかって堂々優勝され、不朽洞杯も手中におさめる二大ホーマーを放たれた。②むじな③漣④薫風子⑤水客⑥多久志⑦須賀太⑧圭井堂⑨杜的⑩きさ子諸氏がベスト10。

金泉万楽氏、竹原川柳会、並木川柳会ほか各支部へ祝電御礼申上げます。

（一三夫記）

懇親宴

川柳まつり夜の部、懇親宴は午後六時から喜楽別館の四階熱海の間で、路郎葭乃両先生を囲んで開かれた。集る者六十名。

間数が六十を越えるこの喜楽別館の最も大きな舞台付の熱海の間は、句会での興奮の余韻と休憩を慰め合う酒盃の交歓で湧き立った。

飲むほどに酔うほどに、宴たけなわ。十悟氏の「唄入観音教」梅志氏の謡、千里氏、好郎氏の小唄、栞氏の落語、茶仏氏の山中節、無鬼氏のデカンショ節は本場ものである。岡山の東岸氏の手品、梅里氏の御存知都々逸、舟遊氏のさのさ節。男性軍につづいてこれは万能選手の花奈女さんが登場される。

狂二氏の楯獲得の感激を拍手の中に語られ、〆女さんの新炭坑節潮花氏の舞踊、きさ子さんの桜貝の歌をフィナーレに、路郎先生万歳を唱和して、また来年逢いましょうを誓いながら定刻九時散会。

（薫風子記）

暑中御伺

高峰柳児
長野県須坂局内太子町

福田妄夢
豊中市牛立二四九

国弘半休
宇部市厚南区西宇部

西いわを
大阪市東住吉区桑津町七ノ二二

川雑 大鉄支部 天王寺支部

吉原紅月　永尾永断
植村客遊子　松川杜的
高木土佐太郎　宮口笛生
塚脇笑太　正本水客
戸倉求女　堀須賀太
辻白溪子　藤本ゆたか
大西雨雀　榎木甚録
奥野正一　阿万万的
西浦一求　浅野飄太
野村初甫　綿谷洸石

株のことなら

江口証券　金泉万樂
自宅（町名変更）大阪市東淀川区淀路本町二の六八九（大阪、北浜）

兼題「長生き」（三才及び輪吟）　麻生葭乃選

長生きをたよりにしてる骨董屋　阿茶
長生きをしてやしてやとたかりに来　日満
孫の死のくやみへひがむ程生きる　葭乃

兼題「天才」中島生々庵選

天才の母の苦労は記事になり　多久志
天才はパリの土をふみたがり　葉乙女
天才を産めとは無理なことを言う　昌男
天才は山下清に逆らわず　生々庵

兼題「光る」正本水客選

かあさんの指輪ダイヤかと思い　伸生
甲斐性なしのまんますっかり光って来　良子
行水の水さえ光るかぐや姫　きさ子
金だらいも鍋も妻の気そのままに　水客

兼題「祭」松江梅里選

慰霊祭遺族補償にふれもせず　貴山
だんじりへ此処で生れた人の顔　水客

花まつり弥陀の甘露をうけて飲み　奈良子
二人して祭囃子を遠く聞く　梅里

席題「冷房」友淵貴山選

冷房が階段ごとに効いて来る　紫香
冷房で扇子は背中撫いただけ　きさ子
冷房のある本店へ詫びに行き　武助
冷房があるので上着蝶ネクタイ　貴山

席題「夜店」小西無鬼選

覚えてた夜店の手品まだ出来ず　太路
しみったれた恋は夜店へ誘い出し　一三夫
抱いた児の言うなり歩いてる夜店　いさむ
ぶらついただけの夜店でくたぶれる　無鬼

席題「風鈴」内藤きさ子選

風鈴を独り楽しむ椅子を寄せ　文秋
意地わるい風風鈴をよけて吹き　梅志
風鈴を嘲に鳴らして買わず去に　奈良子
金魚うとうと風鈴に風もなし　きさ子

席題「息抜き」永松東岸選

息抜きの雨が忙わしい台所　貴山
息抜きのモデル背中をかいている　勢三
息抜きに行けと支店へ変らされ　省三
息抜きにいいと入院いたわられ　東岸

席題「香水」市場沒食子選

ロマンスグレー香水つけてひやかされ　竹荘
香水の心と別な灯を泳ぎ　六竜子
香水で消えぬわきがをもて余し　甕太
香水に思い余った恋を秘め　沒食子

会場の一部　北川春巣氏（中央）の講演を熱心に聴きいる人々。優勝旗が満場を圧するかのように輝く。　（写真カットとも六竜子氏撮影）

交通局川柳会

北川春巣　冨岡淡舟　浜畑胡蝶　児島与呂志　米虫一乃字　山口富村　岡島孤舟　西岡洛酔　橋本雅巣　藤田凡々　梅村文洛　森文夫

豊中支部・雑川

小林山舟　水野水茶　加納山茶花　橋高薫風子　永藤弥平　菊田いさむ　小池しげお　村上ゆずる　黒川紫香　戸田古方

石居高志
東京都杉並区西高井戸一ノ八三

菊地紀久
東京都足立区千住二ノ八三

奥比呂志
東京都板橋区板橋町五ノ九二八

1958年度
•優勝作品決定•

田中狂二氏と優勝楯

特別課題
仲よし

路郎賞受賞句（一席）

333川柳会　田中狂二

これ着ていきと
仲良し服を脱ぎ

本社　吉田圭井堂
ぐれ出した友へ仲よし頼まれる

本社　平田麦稲子
仲よしも呼んで一緒に風呂に入れ

川雑岡山支部　江国幽谷
仲よしにしてねと泣き虫つれて来る

川雑淀川支部　岡部三十郎
夕焼を浴びて仲よし帰って来

川雑淀川支部　木村水堂
仲よしへ家の秘密がみんなもれ

川雑淀川支部　早川清生
仲よしの書棚に貸した二三冊

川雑淀川支部　武部香林
心境の変化仲よしだけが知り

本社　西尾栞
御学友とだけ仲よしとは言わず

前抜（順不同）

川雑小松支部　村下城南
遺言にまでたよられる仲でした

川雑小松支部　位守正柳子
笑い合う禿をカメラが並ばせる

川雑玉造支部　西出一栄
仲よしの今日の欠席気づかわれ

川雑玉造支部　寺元貞句朗
嚙合せさす隙もない仲の好さ

杏林川柳会　海野比呂史
面会謝絶に仲よしだけは通される

鳥ケ辻川柳会　市場没食子
仲よしのそのまま恋になるもよし

鳥ケ辻川柳会　尾崎方正
仲よしと家出する気になるも初夏

川雑名古屋支部　服部随円
仲よしも借りた方から遠ざかる

川雑名古屋支部　細川千草
仲よしがみんな出揃うボーナス日

川雑京都支部　平岩司郎
仲よしのあんないじわるまで似てる

川雑京都支部　村田紫蘭
ねころんで話せる仲のピーナッツ

川雑岡山支部　秀川承平
立候補して仲よしに溝が出来

川雑大駕寺支部　梅田久雄
旅なれた父は相棒もうみつけ

川雑大駕寺支部　木村一路
仲よしのキャンプを白い眼で見られ

川雑大駕寺支部　那谷光郎
仲よしが相談して来た美顔術

川雑広島支部　道原二三夫
久し振り逢った仲よし見栄もなく

川雑広島支部　森川秀月
仲よしの見舞廊下で待たされる

みおつくし川柳会　戸田古方
たかよしのみ上げた月はまんまるい

川雑明和病院支部　村上球絵
仲よしを職につかせる頭下げ

川雑明和病院支部　林閃男
人形と仲よしなのと淋しがり

川雑明和病院支部　栗原光子
渡り鳥のごと仲よしつれだちて

川雑明和病院支部　門永三舟
仲よしの輪に先生もいれられて

川雑篠山支部　小西無鬼
仲よしが誘いに来たにハシカとは

二席

川雑京都支部　田中烏雀
有難や二仏仲よき多宝塔

三席

杏林川柳会　中島小石
仲よしが箸のこけたも電話する

佳作（順不同）

川雑明和病院支部　井上酔月
仲よしをかばった嘘もいじらしく

川雑大駕寺支部　竹浪寿
仲よしの茶羽織髪も同じ型

川雑岡山支部　津田耕水
花たばを抱えてなかよし写される

川雑倉敷支部　水谷谷水
仲よしも変えてあたらしがりやの娘

川雑倉敷支部　荒木狂風
仲よしへ雑種と言うて寄せつけず

竹原川柳会　脇本まさみ
仲よしの子が泣いた子の下駄を持ち

川雑京都支部　柳本憲一郎
仲よしがならんで踏んでゆくペタル

鳥ケ辻川柳会　若林草右
叱られて仲よし一しょに泣き始め

暑中御伺

川雑米子支部
松露川柳会
米子市冨士見町一三五小西方

川雑•篠山支部

田代尋四　前川左文字　遠山一雨　大木枝葉　河原ゆみたの峯　藤本文鬼　山西無凡　小林かる　酒井ひ断　岡沢月　永尾志　大江秋　寺越平　前川喜　畑小菊　保西たけし

川柳雑誌社
備前支部
福田丁路
高槻市大字氷室一、九二の四

林野甦光
余項紅児
呉市吉浦中町二丁目

川雑篠山支部 遠山一雨
仲良しの一人を説けばそれでよし

川雑篠山支部 酒井ひか平
早よう言わんかいと仲よし貸して呉れ

竹原川柳会 山内俊見
一年生もう仲よしを内へ連れ

川雑米子支部 清水一保
仲良しもシノギを削る狭き門

川雑米子支部 土江洋々
夕焼の辻で仲よしまた明日

川雑高知支部 大西迷窓
仲よしがおんなじ人を想いそめ

川雑高知支部 川竹松風
悪友と言うて言われて廿年

川雑鳥取支部 森田茗人
おばあさんの友達愚痴をきけて来る

川雑鳥取支部 森田茗人
転校へもう仲よしが一人出来

川雑鳥取支部 月光
仲よしで見合の席もついて行き

川雑宇部支部 安平次弘道
仲よしも女は嫁ぐまでのもの

川雑宇部支部 平田実男
仲よしの飲めぬ一人へ気をつかい

川雑宇部支部 津秋六花
仲よしの写真も嫁ぐ荷にまとめ

川雑出雲支部 原章峰
仲よしにウインクされた披露宴

川雑出雲支部 まさ子
うれしさはこうも祖父母の仲が良く

川雑下関支部 加島詩酔痴
中傷にもはや揺がぬ友を持ち

川雑備前支部 則次永流
仲よしにして下さいと母頼み

川雑備前支部 横川一声
貧富の差なくて子供は仲がよし

川雑備前支部 兼光浄美
仲よしは春のめざめを知らぬ迄

川雑下関支部 岡藤四郎
仲よしがわけを知ってた娘の家出

帝化川柳会 川島葉乙女
知よしへ風邪をうつして見舞われる

川雑木次支部 石川幸夫
仲良しが何かうつろな笑顔して

川雑木次支部 石川幸夫
仲よしもなくドン底に生きている

川雑木次支部 山本澄子
仲よしに泣いて貰って気が晴れる

川雑阿倍野支部 伊達堰子
仲良しの女中一緒に暇を取り

川雑阿倍野支部 松村笑司
仲良しが気兼ねだした十八九

川雑並木会 木山遠二
嫁入ったまま仲よしへ手紙来ず

川雑並木会 出原真奇
仲よしやないかと利用されただけ

交通島川柳会 西岡洛酔
仲良しもう恥かしい年となり

川柳にしなり支部 中田五色
団体と別に仲よし写真とり

川柳にしなり支部 芝田淡海
仲よしと花火線香を買う宵宮

川雑豊中支部 菊田いさむ
家出した仲よし泊るとこがあり

川雑阿倍野支部 小川恒明
仲よしの約束ママをこまらせる

川雑婦人友の会 吉川悦子
仲良しは必ず二つ買っていに

川雑大淀島支部 正本水客
仲よしの口笛だけでもう分り

川雑阿倍野支部 松江梅里
仲よしへ女は溝をつくらせる

川雑淀川支部 若本多久志
あんたからあんたからと仲よし暖かし

川雑にしなり支部 萬代句念坊
仲よしも仲よし古稀を祝いあい

川雑ハワイ支部 古川魔花麗
下積を自認し合うて仲がよし

川雑ハワイ支部 内藤草一郎
お隣は仲よし破れたままの垣

★

本年から特別課題の入選発表を川雑川柳まつりの当日行われることになった。その第一席に路郎賞を、その所属川雑支部に優勝楯をその日その席で授与されるので、全国及び海外川雑各支部に大きい興味と反響をよび、今や柳界の名物として大きくクローズ・アップされてきた。

特別課題「仲よし」の選評を路郎先生にお願いした。来年度の優勝楯へ今から誓いあいましょう。

「仲よし」を選して

麻生路郎

特別課題の句数は年々殖えてゆく。これは諸君の熱のバロメーターだと言えよう。選句には数日を費やした。そしてすこぶる慎重に優勝句を選出した。333川柳会（堺市）の田中狂二君が第一席に当選した。狂二君は川柳に手を染めてからまだ五年位にしかならぬと聞くが、作句にはなかなか熱心である。第一席をかち得たのも全く熱のたまものであると思う。

ここに、第一席から第三席までの作品の短評を掲げることとした。

田中狂二君の「これ着ていきと仲良し服を脱ぎ」は何んの奇もない表現であるが、兄弟も及ばぬ溢れるような友情を汲みとることが出来るのである。何んかむずかしいことを言わねば句にならぬように思っている人はこうした句を熟読がん味してみる必要があろう。

二席の田中鳥雀君の句「有難や二仏仲よき多宝塔」はなかなか上品に出来ている。上品な構成の点から言えば一席も及ばないが川柳味に於いてやや一席に劣ると思うので第二席に推した。

三席の中島小石さんの「仲よしが箸のこけたも電話する」は実に淡々たる表現であるが、写実による実感を思う存分に出している点を買って三位とした。

以上三句以外にもなかなか優秀な句があった。

終りに、皆さんの熱意ある作品によって、川雑川柳まつりを大いに意義ある催にされたことを感謝する。

入賞に感激して

田中狂二

路郎先生の御誕生を御祝する川柳祭に入賞して感激しております。私に今年二十才になる長男がある。彼れに高校時代からの親友があり、時々家に来ては食事も共にし時には泊って帰る事も度々あった。或る日友が来て「今日は就職を頼みに行くのだ」と言った。「就職にそのまま行くのか、オイこれを着て行けよ」と着ている背広を脱ぎ友に借していた、友は颯爽と出て行った。私はふと其の事を思い出した。これだ

これ着ていきと仲良し服を脱ぎ長男は友が脱いでいったホームスパンの上衣を着て黙々と通勤している。

優勝楯を頂いて

333川柳会 川村好郎

川雑川柳まつり特別課題「仲よし」に333川柳会の狂二君が第一席に入選し栄ある優勝楯を獲得した。全く予期しない栄誉に浴し、只々驚く外はない。

狂二君は333川柳会を創った時に入会し始めて川柳に手を染めたので柳歴もまだ五六年というところ、本年に入って不朽洞会にやっと入会させて頂いたほどの初心者である。

本社句会でも全出席の表彰を受けたこともある熱心さが今日の結実を見たものと思う。

狂二君を始め333川柳会はこの優勝楯を汚がさぬよう柳道精進を誓います。

（七月六日）

入門講座

私の作句法

後藤梅志

私には特べつな作句法というのはないのでありますが、折角のお訊ねですから、ごく手近な句会作句から申上げます。

私は句会へは、なるべく早目に出掛けます。そして、誰もがするように席題を一とわたり見渡しますが、ここが実は肝心なところで、これまでの失敗はここで雑念が這入ることです。題がいいとか悪いとか、人と長々と挨拶したりして、気分を散らしてかかっては到底すらすら句は出よう筈はありません。そこで近頃は、いざ句を作る段になって、題を見ることにしています。なるべく題のよしあしにこだわらず、無造作に端の題から、最初の一句を入念に作り、句は直接句箋に書き、下五を書き終るまでは、句の吟味を怠らぬようします。一句の作句に成功すれば、あとはすらすら出るもののようです。タバコは一題に一本ぐらいにし、句は二句ずつまずつくり、三題六句出来れば、あとは気をらくに作句し、着想を全然かえてかかります。私は、句会は六ケ敷く言えば作句道場ですが、良い意味の遊びと心得て居ります。しかし時間は有効に、一題でタバコを二本も三本も吸うようでは、頭を疲らしてしまいますから、喫煙も慎しみがいりましょう。天の句などはねらわぬがよろしい、兎にかく楽しく作句します。

次に兼題の場合ですが、これは席題作句とはちがい、正攻法でいきます。例えば「灰皿」という題なら、これは装飾品か、実用品か。又は趣味品か、無くても済むものかどうか。むかしはどうしていたか。という風にじっくり腰をおとして、観察にかかります。佳句というものには「情緒」がいるようです。物そのものの正体を把握すれば、自ずから情緒が生れます。情緒とは、心の潤いで、花を見ても心が動かされない人は、作句能力に缺けているとも言えましょう。

さて雑吟の場合でありますが。私は川柳を作る人は、正しい生き方をする人であって欲しいと思います。物おじをしない、そして人の上に立てる人です。川柳は批判を主としますから、それでなければ、批判なぞは生れよう筈はありません。私は寡作の方で、川柳塔の十句がようやくです。作句は気の向いた時、何かの感じにふれた時、思索にくたびれた時、以外は殆んど作句しません。但し月に一句、良句を拾うよう心掛けて居ます。

私は古川柳の愛好者で、昔の人は大いした腕だと思っています。この場合批判があろうがなかろうが。例えばです

ぱらりつと潮干は
人を蒔いたやう

という句などは、じつに絶品で、道を歩いていてもよく頭へ浮びます。この調子。この句韻の高さ、これが私の川柳への魅力です。

批判の句というものは、批判しようと思って生れるものではなく。何かの感じ方から批判に通ようもののようです。私の句で

収入がなくなり食える世
とわかり

という句は、有力な会社に居りながらストばかりしている。ベースアップというものは最初は食えんからというのが始りだったが、年々これを繰り返している。笑止千万。という気持がこの句を生んだ訳です。これは単に一例にすぎません。失敗を言えば、私の過去の作品

恩を知る
点では犬に
さえ劣り

とか

最短をゆ
く暗殺もわ
るくなし

という句などは、当時随分批判を利かしたつもりでしたが、時を経てみると、余りに句がドギドギしすぎ、句に魅力というものがない。

ウロコ印
武田薬品
神経痛 疲労に
リウマチ・便秘・脚気・肺結核の補助療法にも
★新型ビタミンB1剤
アリナミン 糖衣錠
30錠
100錠
300錠
大阪市東区道修町 武田薬品工業株式会社

暑中御伺

小児科・沢田医院
沢田四郎作
大阪市西成区玉出本通り一ノ一三

大阪遞信病院
烏ケ辻川柳会
会長 尾崎方正　西辻竹青
市場没食子　桝本蕗児
水谷竹荘　木村喜男
仲谷ハナ子　小野木凡平
幹事 小沢史葉　生越正徳
若林草右　真野康彦
池戸桃村　乾静夫
足立春雄
幹事 橋本幸男　客員 北川春巣

不二田一三夫

村山静修
大阪市住吉区浜口町三九六

広島県豊田郡竹原町田中
竹原川柳会
会長 松井可笑

刀で言えば村正のようなもので、一夜造りの感を免れません。漸くこの頃、句の柔軟性ということに気付いたような次第であります。

以上三つの場合の、作句態度を申述べましたが、新人諸君の御参考になるかどうかこれがまず私の「作句法」のあらましであります。

明朗な心で作句する

岡田夜潮

多読多作の必要は言うまでもないが、なかなか実行がむつかしい。

私はいつも鉛筆とメモを携えている。見たこと聞いたこと、これは句になりそうなことを書きとめておく。その場で句になればそのまま記す。そして数日間蒸しておいて推敲に取りかかる。これは余程効果があるようだ。句会で相撲吟などすることがあるが、これはほんの余興だけであって、推敲もなければ心の落ちつきもなく、従って命ある句が生れよう筈がない。

私はいつも明朗な心で作句したいと心がけている。常に公明正大で心中一点の曇の無い時人情の機微を捉えようと心がけている。

★

山川阿茶さんと久米奈良子さん

五月の川雑婦人友の会の三周年記念川柳大会で、堂々優勝された山川阿茶さんが、七月の川柳まつりにはまたまた優勝された。破竹の勢いとは、こういう時に使うことばであろう。男性軍からも一応はマークされていた阿茶さんではあったが、不朽洞杯までに句神がほおえむとは、やはり日ごろの精進のたまものであろう。

六月の本社句会で天位二題をかち得た久米奈良子さん、川柳まつりにもまた天位が二つ。現在本社句会天位ダービーのトップを行く人であり、毎日柳壇七月の特選第一席と快調がつづいている。小集句会の投句を先輩に頼んだが、帰宅後わずか一字補筆するため、わざわざバスでまた駈けつけたという熱の人でもある。

(F)

金泥集

選 麻生葭乃

「水着」 課題

天

釣銭の入れ場に困る海水着　葉乙女

地

気象台水着の売れる予報出し　知恵

人

十年も前の水着で子と泳ぎ　春栄

十秀

陳列の水着へさくら貝を置き　きさ子
アパートの五番七番水着干す　同
金槌のくせに水着をよりごのみ　清子
黒一色の水着が上げた日章旗　同
ロケに来た水着を島の娘がかこみ　花代子
ボートまで水着きれいなねぎを見せ　同
ストリップ一歩手前の水着ショック　白美
水着着て気軽るに行けるとこに住み　春栄
砂つけた水着で坐る月見草　千代美
M過剰水着も地味な色を選り　若芽

平抜

明日の日が待てず座敷で水着つけ　和子
泳げない水着の柄を褒め合うて　千代美
水着今日国を背負って立つ羽田　美恵子
スタイルを言わずトップモードの水着買い　美喜
水着姿娘になったなと思い　初穂
ちと派手に水着夫をおどろかせ　俊江
人目引く水着姿に母案じ　悦子
ミスばやり水着姿が美を競い　奈良子
流行の水着今年は何処開けよ　阿茶
シャッターへ胸をそらせる水着の娘　文女
頼んでも見られぬ肌を見る水着　栄子
先生の水着へ生徒がもうさわぎ　たつよ
華やかな水着で染める海の色　玉枝
新婚の水着は遠く人をさけ　万女
空と水中を彩る娘の水着　周甫
自家用車水着のお着き砂焼けり　とよ
目をつむり水着の胸を波につけ　沙智子
水にふれず水着と水着たわむれて　雅佐女
海水着追う母の體が疲れて居　都詩子
残暑なおきびしく水着虫を聞く　知恵美
サングラス水着の母が若すぎる　陽子
新婚の夫は水着きせたがり　若菜
水着着てミスは舞台をねりあるき　花奈女
かなづちが水着姿で闊歩する　章子
映画より水着がさそう海に行き　小菊
色あせた水着がいつちよく泳ぎ　一栄
一世紀前の水着がよく泳ぎ　〆女
ガールフレンドですと水着ではばからず　徳子

暑中御見舞申上げます

川雑婦人友の会

麻生葭乃　沢田美喜
杉原吟女　杉本たつよ
中島小石　鎌田銀子
高橋操子　市場カネ女
武部若菜　杉本知恵
太田良子　藤井雅佐女
内藤きさ子　光好陽子
西村梨里　久米奈良子
山川阿茶　岡田花奈女
池上知恵美　川島葉乙女
小西冨士子　宝多貞美
藤村梨花　鳥取周甫
西出一栄　坂東若芽
酒田清子　清水明枝
和田登志子　中村晴
桑山とよ　国府玉枝
竹内花代子　池田文女
須藤俊江　吉川悦子
藤川沙智子　内藤白美
藤村〆女　山田スミ子
西田初穂　酒田章子
畑小菊　大田栄子
遠山よし子　林春栄
永松あやめ　麻生貴州
石川ひさみ　丸尾潮花
板東千代美

岸和田川柳会
岸和田市宮本町二六三
山田季賛
山田スミ子
広島県安佐郡可部町
大手寺公営住宅四号

一路集

押入れ

丸尾潮花選

押入れのガリガリガリが寝させない　万女
アパートの押入れ故郷の米も置き　白峰
押入れも開けとは野暮な執達吏　承平
押入れで陽の目を見たい客蒲団　敏子
押入れの位置を仲人ほめて去に　兼治郎
赤線をやめて押入れ邪魔になり　華甫
押入れをベッドルームにして洋間　狂二
押入れの中でクスクス笑い出し　幽谷
花嫁の荷が押入れをせまくする　実男
押入で鼠は派手に恋をする　進之助
押入れへ猫ほり込んだまま忘れ　鳴恍
押入れが静かになって案じ出し　静馬
押入れのなかでクシャミが出る居留守　澄江
押入れも見せて税吏を泣きおとし　雄々
貸間札押入れあけたままで置き　恵二朗
押入れの隅まで貧乏しみ通り　芳仙
押入れものぞいて家賃まけさす気　むじな
押入れのなかで腕白ふてくされ　房子
差押え来そうで押入れかわしとき　たつよ
そそつかしい押入れに鼠つい入れて　周甫
押入れがジャングル雨の日の子供　一進
下宿代押入れ付きの金を取り　恒雄
押入れの整理もされる仲になり　保美
押入れが一番こわい子のわるさ　清人
押入れに長寿の秘訣置いて飲み　光郎
押入れをからっぽにする五月晴れ　三四郎
高級アパート押入れとは名前だけ　比呂子
押入れのねずみ私はノイローゼ　不二
母さんの癖押入れへみんな入れ　七面山
押入れの引手何かを秘めたよう　白李
押入れでふて寝しました抵抗期　十九平
押入れに仕舞ったままで黴にさせ　九呂平
先代の趣味押入れに仕舞うたまま　牧人
押入れに首突込んでまでも飲み　幸路
押入れへ風とおしたい程つまり　笑太
押入れのもよう後妻が来て変り　葵丘
押入れのぼろが暦屋を喜ばせ　隆文
押入れを二段に区切る子のベッド　一休
押入れに妻の秘密の個所があり　洛酔
押入れに恋人が居て落ちつかず　明朗
押入れへすねて入った子が眠り　悦子
押入れも開けて新築見せてくれ　木魚
押入れにかくれる隙を残しとき　みのる
押入れを開けたまんまで誘われる　知恵美
押入れのねずみの知恵に悩まされ　初甫
押入れの戸が動かない埋立地　翠月
押入れも片付けて去ぬ里の母　牧人
押入れへ靴も並べて居る間借り　鵜汀
押入れの中雑然と恋もなく　上利
栄転の荷が押入れにはいりかね　藤波
床上げてから押入れはもとの嵩　代仕男
押入れへ子の手に余る夜具を積み　同
佳
押入れへ目白を入れる大掃除　雄声
押入れの隅まで梅雨が忍び込み　昌男
押入れを開けて隣の喧嘩聞く　万古
押入れの暗さに慣れた帳簞笥　蜻蛉
押入れはほり込むものと子は覚え　愛鳩
押入れの中にも寝てた大世帯　銀子
押入れのなかでぶつぶつぶが湧き　陽子
人

色紙短冊
書畫用品
大阪戎橋筋
丹青堂
電南七二一・七二二

暑中御伺

川柳雑誌社
小松支部

川柳雑誌社ハワイ支部
ウイロー社
同一人同

川雑淀川支部
大阪市東淀川区十八条町一丁目二一
武部香林　若本多久志　西森花村　坂田東洋男　志水礼司　早川清生　武部若菜　岡部三十郎　小林文児　小島さぎす　別所灯子　木村水堂

押入をあけると枕ころげ落ち　葉光
地
押入れでまだかんにんを言わない子　漣
天
押入れへ首突込んで貸して呉れ　蜻蛉
軸
押入れのなかに心中の荷が残り　潮花

特急

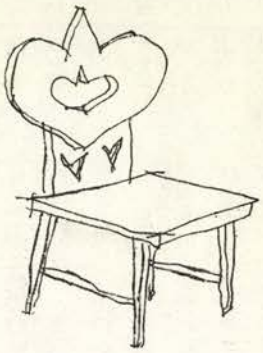
津田麥太楼選

いまいましげに特急をやり過し（どんたく）　恵二朗
左遷とは見えず特二にそりかえり　白渡子
特急の駅弁三等だけ歩き　隆文
特急の手紙へ一寸手がふるえ　栄転へ心もはずむ特急車　進之助
特急に乗り電報を読み返し　葉光
子の危篤（キトク）特急の遅いこと遅いこと　喪服まで詰めて乗り込む特急車　陽子
特急の中を駈けたい程多忙　保美
特急でヨウと社長の眼に出合い　知恵美
特急の良さ特急に乗って知り　七面山
特急でゴルフへ通ういい身分　十九平
素朴さが特急券を握りしめ　敏子
特急でばったり昔の彼れと会い　圭井堂
特急へ身まわり品の軽い旅　白峰
特急でスターかけ持させられる　鳴恍
特急は母の危篤へただ一度　三四郎
特急を降りる態度に親しめず　雄々
お名残りも特急という忙しさ　越舟
特急車故郷に遠く乗り換える　万古
ハトツバメ駅弁の声まで元気　笑太
どの箱も明るく光る特急車　万古
特急にすればあんまり早う着き　九呂平
特急で着いてパチンコやっている　秀三
特急で降りてテクテク歩いて来　幽谷
特急車だけにサービスしてるよう　清人
特急で来て乗り換えたお国入り　忠三
特急に乗るに三里の山を越え　美音子
特急のカーブ車輪が宙に浮き　一鶴
特急車ガランと空いて通過する　牧人
当選がさっさと帰る特急車　狂二
五分間停車特急音で過ぎ　宗太郎
特急へ土曜夫人を派手に連れ　十九平
汽笛一声特急素通りし　蜻蛉
特急の判を持ってるふところ手　夜潮
合併の市制特急停らない　恒雄
特急で来て焼香の順を待ち　一休
低音でハンサム特急車の車掌　恵二朗
特急の汽笛へ田植笠がゆれ　同
取りあえず特急で行くことに決め　蜻蛉
特急の窓で社長と呼んでやり　むじな
特急の中からステテコぞろぞろ出　葵丘
特急で乗り越し車内歩いてる　芳仙
特急を舞妓が送る京の旅　笑太
特急は門を走って駅遠し　万女
朗報も得ず特急の客となり　上利
特急に一度は乗りたいなと思い　無山
旅馴れた特急浴衣にすぐ着更え　光郎
佳
特急で来たお疲れをいたわられ　光郎
瀬野八本松さすが特急あこを出し　俊見
盆踊りチラリと特急通り過ぎ　白李
女社長さんのお供をして特急虹要
特急車小雨をついて滑り込み　鶏汀
人
特急と云うつれづれを酒に酔い　進之助
地
特急が結ぶ京の灯浪速の灯　夢路
天
特急を抜いて燕がひるがえる　葉光

暑中御伺

川柳雑誌社 木次支部	川柳雑誌社鳥取支部 鳥取川柳会一同	暑中お見舞申上げます 3・3・3川柳会	川柳雑誌社 大聖寺支部 加賀市大聖寺永町四八

柳界展望



句会

▼本社八月句会は七日（木）午後六時下寺町光明寺で開催する。七月六日の川柳まつり句会はすこぶる盛会であった。躍進川雑のバロメーターである川雑本社句会は、これから益々熱が這入ってゆくであろう。▼杏林川柳会（大阪市）句会は七月廿二日午後七時半河村瑞川居で開催。▼大阪逓信病院鳥ケ辻句会（大阪市）は七月十二日（土）五階会議室で開催。▼南海電鉄（大阪市）句会は七月廿四日（木）午後六時半ナンバ駅親和くらぶで開催。以上何れも路郎主幹出席。▼秋の市民文化祭川柳大会（大阪市）は大阪市・市教育委員会。関西短詩文学連盟。大阪川柳連盟主催毎日新聞社後援で来る十月十九日（日）十一時毎日新聞社講堂に於て開催と決定した。追て詳細は九月号で各社一斉に発表する予定である。▼宇和祭協賛川柳大会（広島市）は広島川柳社の主催で八月三日（日）午後一時から袋町山鳴記念館ホールで開催。テーマ、遺船所・馬・二死満塁・潮・盆栽・墓地・千羽鶴・平和（各三句）投句料二十円広島市鷹匠町広島川柳社宛七月末日〆切。▼竹原川柳会（広島県）主催同地文芸協会外諸団体後援の近県川柳大会は九月十四日（日）十一時竹原小学校会議室で開催。兼題、酒・窓・手・鍬・再会・別れ・立話し各題三句。投句は縦六寸横一寸の句箋に認め郵券五十円封入九月十日迄に竹原町竹原川柳会宛送付のこと。▼愛媛川柳大会（大洲市）木郷川柳社の主催で八月三日（日）午前十時大洲市竜護山で開催。兼題（三句）思う壹・親指・煮える・溜息・木蔭・遣ざかる・金魚、投句先大洲市常盤町米沢暁明宛（七月末日迄）。▼乃木川柳会（松江市）一周年記念句会は八月十日（日）午前九時松江市中央公民館で開催。兼題、正面・西瓜・竹藪・花火・祝盃各題五句〆切八月五日投句先松江市浜乃木町一八四句会柳原竜雪宛。▼川柳文学社（大阪市）一周年記念句会は七月八日（火）午後六時中の島豊国神社で開催。諸派柳友三十余名の盛会。▼川雑宇部支部（山口県）では今回宇部市文化連盟主催の展示会で川柳作品の色紙、短冊を出品し好評を拍した。▼川雑宇部支部及下関一杯水川柳会の共催句会は七月十三日（日）白鳥で名高い宇部常盤の池で開催。会員多数出席▼川雑岡山支部句会は七月十二日例会を開催。▼島根県国立療養所葦川柳会句会は六月二十八日夕同所で開催。▼川雑倉敷支部（岡山県）句会は七月六日午後一時椙原一善居で開催。▼川雑鳥取支部（鳥取市）句会は七月五日夜りいち画房にて開催。▼川雑備前支部（岡山県）句会は七月十日に一声居で開催▼川雑阿倍野支部（大阪市）句会は七月十六日阿倍野区旭町二丁目金塚会館で開催、豆秋・十悟・堰子・文秋、一三夫諸氏の大活躍で昔の名門ぶりに返り咲きした由ご発展を祈る。

消息

上田翠光氏（奈良県）は去る朝日新聞地方産業欄へ「茶と酪農で百万円」と言う見出しで篤農家として紹介されている。氏は早稲栽培、木田老朽防止に尽力し、佐賀県の神崎農業高等学校生徒三名を験修生としてあずかった事もあり、農林省から奈良県へ畑作振興の実体調査に来た時も山間地帯の現地説明のために案内役をつとめている。将来は県下農村の文化方面へも貢献するであろうと噂されている。▼路郎主幹と親交の深い河上一也画伯（奈良市）は一木会々員で肖像画をよくされるので油絵の肖像画をご希望の方があればご便宜をはかるそうですから路郎主幹まで申越されたい▼古川魔花麗氏（ホノルル市）のエアーメールによると、「こちらの魚釣りは相当危険性をともなうので今頃はやりません。その代り洋蘭栽培をはじめて居ります現在のところ百八九十鉢集めました近いうちにグリンハウスを作って三百鉢を目標にしてやっております。私が作り役、家内は咲いた花を切り役で私の方が大分損らしいです」と▼橋本緑雨氏（大阪市）は六月二十九日写真連盟連動会で片山津温泉へ七〇〇名臨時列車で乗込み一泊した。▼築山快夢起氏（ホノルル市）は五月ロスを出発桑港に遊びさらに

食堂とホテルと集会場
北極星
•ご休憩お一人様200円 •お宿りお一人様400円
大阪•戎橋 TEL 戎(64)1275～7

シャトルから晩香坡へとバス旅行をつづけられた。左にバンクーバからの句信。「国境は何処も富樫の眼が光り」▼菱田満秋氏（西宮市）は七月七日第三回目の手術をうけ経過良好。これで八年半にわたる長い病院生活に終止符をうつ自信がついたと元気なお便り。▼高野むじな氏（新潟県）は佐渡から遥々本社川柳まつり句会に出席された。お会いして見れば雅号で想像したのとちがい若々しい学校の先生であった。左に句信。「通天閣だけ見て大阪を見た話」▼杉本一鶴氏（貝塚市）は手術後の経過良好、左の句信があった。「無意識に手術した方かばって居」▼藤井明朗氏（木次支部）は戦場旅行で四国屋島へ行かれ左のお便りがあった。「旅せわし金刀比羅屋島かけ巡り」

慶　弔

▼本社洞友亀井花童子氏（函館市）は六月二十四日宿あの肝臓癌で逝去された。謹んで哀悼の意を表する。同氏は函館川柳社の生みの親で同社では八月二十日追悼句会を行われる由。▼木村水堂氏（大阪市）母堂スエ殿は去る六月二十二日十八条町の自宅で永眠された行年七十五才哀悼。

転　居

▼前川越山氏（篠山支部）は今回北山越山と改姓され多紀郡丹南町西古佐に転居された。（梅）

不朽洞会から

★常任理事会

六月二十日夜七時生々庵居で開催。出席路郎主幹、副主幹、正副理事長外五名。協議事項は、一、常任理事会々費を六月以降廃止する件。二、これに代るべき財源の件。三、川柳まつり実行上の案件等。（多）

★新会員紹介——七月入会

▼米虫一乃字氏（大阪市）正会員——淡舟氏推薦

▼傍島静馬氏（神戸市）正会員——いわを氏推薦

▼杉原吟女氏（大津市）正会員——葭乃女史推薦

★退　会

佐藤千代春氏は家事の都合上七月限り退会された。

社の黒板

▼本欄の原稿は楷書で、何月何日にどこで何があったと、月と日を忘れずお知らせください。▼句会予告は、題と日がきまれば、あすといわず、きょう直ぐご通知ください。毎月二十日には印刷所へ原稿を回しますから、乗りおくれぬようお願いします。▼一路集の募集規定が変更しました。（四十六ページ参照）

事務用品専門店
事務用・文具・器機・什器
株式会社 心斉橋クニヤ
本店 心斉橋北詰
電(23) 4749—1
阪神店 阪神百貨店五階
電(36) 1201

不朽洞の人々

俺だけになんで女のことばかり

（南柳）

三二年六月、紀州の灘八丁へサッソウと出掛けたカメラマニヤの岸南柳氏。同氏経営の理髪「男まえ」の門前の黒板にはいつも自作川柳を掲げていられる。

カメラをいじり出してからもう三十五年になります。
毎日新聞で金メタルをもらつたのが病みつきだんね。
これは鬼怒川温泉、これは日光、これはヌードだす。どれも入選作ですよ。

不朽洞会員ならどなたでも結構です。われとおもわん方は珍しい写真を送つて下さい。
—編集局

花地柳壇

いのちある句を創れ

投稿規定
▼用紙は原稿用紙▼文字は正確▼締切毎月二〇日▼投稿先本社宛

社本 川柳まつり（大阪市）

7月6日　午後1時

会場—光明寺

今や柳界の名物として、わが川雑川柳まつりが、年々盛大になっていくことはまことに力強い極みである。本文2ページにあるように、三十三年度の麻生路郎賞ともいうべき「仲よし」の第一席入選者は3・3・3川柳会の田中狂二氏に決まり、七月の不朽洞賞杯は友の会の山川阿茶さんが握られ、しかも入選数第一位という、レディ・ファストをその実力によって示された。

本欄には佳作以下平抜き収録。（F）

出席者—路郎・潮花・花代子・いさむ・水断・一三夫・文秋・薫風子・昌男・春栄・東洋男・美喜・月都・与呂志・狂二、鳩花・悦子・美恵子・淡舟・庸佑・梅里・水客・葉乙女、客遊子・俊見・恒明・〆女・求女・昌彦・花奈女・満潮・鵜汀・三司・清潮・好郎・紅月・高史・黙平・清子・一栄・登志子・句念坊・漣・多久志・三十郎・十悟・葉光・一興・蘭・笛生・須賀太・淡海・雄声・玲人・菁風・伸生・牧人・勢三・茶仏・圭水・むじな・柳宏子・堰子・圭井堂・阿茶・南宗・笑司・義弘・旅風・井平・晃・吟女・東岸・典正・杜的・ひか平・越山・無鬼・弦月・梅志・花車・三舟・静馬・省三・知恵・樹峯・凡志・千里・奈那・弘・浩青・煙司・武助・きさ子・貴山・操子・黒天子・古竹・さぎす・舟遊・正明・生々庵・小石・鳥雀・蓉子・一求・春巣・栞・白水・利武・栄子・六竜子・冗歩・奈良子・竹荘・良子・太路・博也・進之助・没食子・水堂・すゝむ・いわを・幸雄・悟朗・繁雄・万的・亜鈍・凡九郎・甎太・宏子・葭乃

兼題「長生き」　麻生葭乃選

長生きをする気無配の株を買い　知恵
長生きへ逆らわぬ気の酒を注ぎ　旅風
長生きのサンプルとして写される　恒明
長生きの未だ刑務所の世話になり　静馬
長生きをして末っ子毋泣かせ　真奇
連れはもう冥土の方が多くなり　省三
余生なお露天商う日のこどく　伸生
金婚と言うに海老にもならぬ腰　一栄
長生きの閑は詠歌を習い出し　須賀太
長生き等しないとアプレ思うてる　むじな
薬瓶はなさず喜の字通り越し　阿茶
孫のある伴を呼んで叱りつけ　晃
長生きやなと生活扶助貰い　堰子
手さばきも八十路と見えぬ舞扇　圭井堂
長生きは三代続く渡り初め　梅里
長生きをせえとのろけの腰を折り　千里
長生きのお蔭寝ていて歌舞伎を見　冗歩
長生きをして焼香も板につき　花車
敬老会長生き順に座が決り　美音子
長生きへ息子がテレビ買ってくれ　博也
長生きへマイクは失礼な事も聞き　省三
長生きの勝手な時はよく聞え　薫風子
長生きはしたし息子と折合えず　三十郎
長生きを気にする母に手をつかれ　茶仏
恩給があるので長生きいたわられ　水堂
長生きを囲み知名の士が並び　没食子
孫よせて三つの歌に出る稽古　圭井堂
心配は子がしてくれて長生きし　登志子
長生きの祖母は自慢の針を持ち　悦子
まだ生きる気か八十のドッタン入り　たく

兼題「天才」　中島生々庵選

天才も家ではおやつねだってい　失名
天才を見逃がし他社へ引き抜かれ　旅風
紙一重などと天才けなされる　阿茶
天才も儲けることは知っており　三十郎
自殺してから天才に数えられ　桃里
天才をほめる言葉に角があり　水客
天才は案外妻に敷かれて居　雄声
天才を金に換算して凡人　春巣
天才と知れた我が子が怖くなり　牧人
天才の相あり女難の相もあり　鳩花
つんつるてんの浴衣で天才写される　きさ子
天才も一杯やればただの人　清潮
天才はもう日本へ帰らないいわを　樹峯
天才も今は五人の母となり　多久志
天才の姉は祇園で褄をとり　博也
天才も僕とおんなじ本を読み　堰子
逆さまと判ってピカソかけ直し　登志子
天才の恋外国で毒をのみ　静馬
豚箱でスリ天才を自慢する　陽子
天才が似顔を書いて朽ちて行き　知恵美
天才で通り美人の名で通り　阿茶
天才のきわどい線を往ききする　漣
金借りる天才重役に迎えられ　古竹
天才は人形みたいに踊らされ　阿茶
天才のデビューを母に附添われ　牧人
天才の名をパチンコ屋でもらい　幽谷
天才にもう限界が来たあせり　梅志
カンニングの天才校歌だけ覚え　十悟
マスコミに載って天才放浪し　奈良子
天才の寝顔こんなに口を開け　一三夫

兼題「光る」　正本水客選

その無口今となっては光るなり　失名
社会科でつぶされた螢まだ光り　失名
旅にいる心ゆたかに靴光る　春巣
稲妻が後追うように又光る　芙路
大阪に出る月ネオンに負けそうな　夢路
木の間から飛び出す蝉の羽光る　貴山
光っとるぞと声援が飛び草野球　日満
フラッシュへ総理如才のない笑い　一鶴
実力を割引された七光り　漣
留守番が心許ない稲光り　奈良子
光ってるだけで会長持たせられ　むじな
親子三人どうにか食える七光り　鵜汀
ピカ一はどうぞ借りて来た選手　阿茶
子の出来がよいので親もちと光り　遠二
眼帯をとれば光りが眼にしみる　周甫
よく光る小刀子供切って見せ　俊見
水乞いに思わせ振りな稲光り　生々庵
貧乏もよしと男の目の光り　夢路
イヤリング誘惑してという光り　貴山
ゆか下の猫不きげんな目の光り　浩青
磨いたら光る珠にも運不運　葉光
ピカ一と自分も意識してる所作　無鬼
光るものみな光らせて夜の王女　茶仏
釣舟の木の間がくれに灯が光る　紫香
廊下まで光らし古く旧く生き　千里
お土産の螢へ部屋を暗くする　須賀太
親の目が光っている間に分家させ　美音子
シグナルの光都会が近くなり　牧人
スターの意地親の光りと言われまい　むじな
露ころり落ちて螢が又光り　越山

一きは光るのを嫁にと言われ怖気付き　月都
夕立ちの空が光ったすだれ越し　淡舟
住む人の心が光る台所　俊見
光ってた美技と郷土紙だけが褒め　永断
光ってる方が偽物だと判り　南宗
だんじりの鈴へ西陽の容赦せず　杜的
ヘッドライトペックちつともたじろかず　三十郎
抜き捨てる草にも光る露の玉　美音子
寂として月の光りに浮く壁画　潮花
鰯の群が来た来た沖が光る朝　きさ子
梅雨あけの圃道草が光るなり　紫香
なごやかにランプの光るナント村　いさむ
目に光るもので無言の抵抗し　弦月
潜戸を出ればまぶしい日の光り　鶏汀
光ってた涙見ぬふりして別れ　越舟
カンテラにゆだねて裸身坑下る　すゝむ
光る程螢は哀愁おびて見え　圭水
稲光り女子の顔がすごう見え　吟女
先代が光り過ぎてしんどいよ　十悟

兼題「祭」　松江梅里選

ステテコのままで訪れる夏祭り　鶏汀
水都祭なにわの誇り持ちこたえ　春栄
好きやなあと祭へ妻はさからわず　阿茶
ロケ隊に村は祭のようになり　菁風
すねた子が一人祭の輪をはなれ　むじな
病める子へ祭太鼓がひびきすぎ　陽子
祭りには帰って来いと母の筆　美恵子
貰い水鈴も聒けてる祭の子　昌男
足どりも重い祭りを戻る獅子　井平
しもたやのここも提灯つく祭り　梅志
売らんかな商ン人祭りこしらえて　十悟
お祭の宵の灯かげを抜けて逢い　煙司
スムースに済んだ祭がものたらず　雄声
テレビでも買うたか祭に来いと言う　杜的
そうめんがつるりとうまし夏祭　豆秋
ドカドカとあとの祭へ来て騒ぎ　省三
えらいやつもやえらいやつもやが祭りにし　多久志
お渡りへみな出払った冷やっこ　三司
肩車祭太鼓へせかされる真奇　
ビール抜く裸が見える夏祭り　紫香
御みこしのポスと巡査に付添われ　一栄
テキ屋達泣かせて祭り雨になり　十悟
お祭りは寄附した丈ですんじまい　古竹
秋祭り恋へザクロの実が赤い　潮花
さすが天神さんやなあ此の人出　漣
夏祭り男に似合う豆絞り　薫風子
お祭の由来年寄だけ信じ　求女
おみこしの方へ寿司巻く手が休み　葉乙女
夏祭り素肌に暑い猿田彦　悟朗
町内の序列祭の役も決め　三十郎
お祭へ一升買うて婿を待ち　春巣
祇園ばやし新選組が出て来そう　一三夫
祭から祭へどさの荷が届き　圭井堂
よそさんの祭ものぞく子煩悩　漣
お祭へ去年と同じ巫女が舞い　蘭
お祭へ母はうかれただけのこと　操子
夏祭りわざわざ高いタコを食い　一三夫
お祭にお出でを当てにして居らず　茶仏
参道は関東煮の湯気もよし　いさむ
二階から山鉾が見えます案内状　栞
ちっぽけな祭も私鉄見逃さず　圭水
病める娘の願いの糸の星祭り　奈良子
お祭りと言う口実へ飲めるなり　無鬼
定年も近し祭りの寄附も来る　浩青
肝心の行事忘れた前後祭　幽谷
祭の灯ひとり来たのがあほらしく　恒明
お祭りがそこまで来てる杭が立ち　昌男
祭からまつりへ蛇を抱く女　玲人
鯖寿しの青さへ在り日の母思う　杜的

席題「香水」　市場没食子選

香水を振って最後の鏡見る　好郎
プレゼントされた香水つけて逢い　俊見
香水の匂う看護婦非番なり　薫風子
香水の匂いに遠く汗をふき　雄声
香水でつまらん見栄を妻は持ち　恒明
香水はまだまだいらぬ食いざかり　笑司
サロン用と違う香水振って逢い　東洋男
宣伝の香水派手に振ってくれ　紅月
田舎バス安香水と乗り合わせ　煙司
湯上りの襟へ匂わす一しずく　井平
香水を匂わせ紅一点が派手　美恵子
ラブレター香水ふって封をする　狂二
喪服着ていても香水ちと匂い　紫香
フランスの匂いさせても妻は妻　ひか平
香水が匂い吊革持ちかえる　煙司
制服の誰か香水つけている　きさ子
割込んだ席香水が匂って来　三司
香水のハンカチさりげなく返し　梅志
よろめいてみる気香水まで変えて　越山
息づまる中へ香水ぷんと来る　雄声
香水も振って訣別の蓋を取り　圭井堂
出なおして来て香水をにおわせる　白水
人柄も見せて香水すれ違い　生々庵
ジャスミンに惹きつけられたような恋　晃
香水のしみが残っている扇子　潮花
香水つけて今宵イエスというもり　きさ子
子沢山香水などに気も付かず　悦子
香水の匂い血圧上りそう　栞
香水も齢意識したものにする　万的
感づかれたくない生理日の香水　春栄
香水の移り香妻に嗅ぎつかれ　柳安子
香水風呂へ男独りのあほらしさ　多久志
香水をふれと病人気をつかい　奈良子
ええのん出来たんかと香水冷かされ　須賀太

席題「冷房」　友淵貴山選

冷房も効いてないのによく待たせ　良子
冷房へ来た母さんの深呼吸　漣
冷房の部屋に勤めてお茶を汲む　水客
冷房を借金取りがほめ立てる　博也
冷房がきいておしっこ又せがみ　越山
冷房喫茶ホットですねとだめおされ　客遊子
冷房は完備息苦しいシーン　勢三
冷房の風に向き合う善後策　昌男
冷房もトイレーまでは届きかね　春巣
早産をあの冷房のせいにする　圭井堂
冷房に来てネクタイをしめ直し　生々庵
冷房がきいて冷たいものが出ず　阿茶
冷房の茶室女は伏目でい　万的
すき焼の箸冷房が利きすぎる　水客
冷房をしてから違う客が出来　博也
冷房を入れて赤字と斗わむ　葉光
リウマチス冷房きかぬ部屋へ逃げ　阿茶
冷房の握ってる手に応えなし　ひか平
冷房が出来て真夏の手術台　没食子
冷房は出し放して社長留守　いさむ
冷房完備読めぬか扇子使う人　求女
地下二階冷房に置く鯛の色　淡海
パーマ屋の冷房の足がよく冷える　操子
熱帯魚冷房の中で風邪を引き　進之助
支那そばの座席冷房きくところ　太路
冷房の部屋でじっくり聞くこと　義弘
冷房のビルでアイヌの腕ふるう　武助
冷房が入って蠅もチトあわて　多久志
冷房を特売場は知らぬ顔　黙平
冷房の風が真夏の寝を逃げ　昌彦
冷房も頼りないほど純な恋　浩青
ゆっくりと走ってほしい冷房車　淡海
神前結婚冷房完備しています　満潮
冷房はあっても事務のだるい顔　晃

席題「夜店」　小西無鬼選

夜店行き帰ってさいふすっからかん　典正
母にねだるもの見定めに来た夜店　黙平
出目金が今日も残っている夜店　越山
父がもうむきに金魚を追う夜店　永断
玄関口夜店だけとは言えぬ酔　好郎
いざこざの憂さを晴らしに出た夜店　梅里
鈴虫を買ったが夜店ほど鳴かず　知恵
夜店から帰り子のないぢが出る　操子
再生の道を夜店の灯に求めさぎす　茶仏
夜店での金魚三日とはもたず　笑司
金策に行くとは知らぬ夜店の灯　杜的
終電へ夜店はガスの灯を細め　東岸
暑さとは別に夜店の人の波　莢月
ボーナスの一部夜店へ奉仕する　凡志
ギター弾く白衣へ夜店の灯の淡く　杜的
駅前もここまでという夜店の灯　木客
ひと廻り夜店廻って飲み直し　東岸
又しても夜店で花火買わされる　ひか平
十円の品も値切ってみる夜店　花車
夜店から夜店を流れ生きている　吟女
けったいな物ばかり買う夜店好き　千里
ほたる売り継子のように居る夜店　恒明
夕立へ軒で夜店は思案する　庸佑
潮時を心得夜店の香具師の弁　六竜子
老妻の夜店愉しむお伴する　旅風
植木鉢夜店で買うたのが枯れず　須賀太
残業を終えて夜店の街を縫う　昌彦
歌麿も大観も夜店ですましてる　生々庵
打水がすんだ夜店へ早よ連れて　貴山
詰将棋だけを残して夜店の灯　満潮
妻と子を連れて夜店を素通りし　越山
悪友と会うて夜店が高うつき　むじな
純な恋夜店往復歩くだけ　〆女
夜店の灯平和日本を意識する　圭水
叱られる夜店は裏口から這入り　良子
十円を固く握って子の夜店　六竜子
強盗に夜店のドスで驚かされ　茶仏
新婚の夜店へさえる選る浴衣　漣
夜店から家までつけて来た不良　圭井堂
鬼灯を鳴らして夜店から戻り　薫風子
夜店から帰り湯ざめの涙をかみ　三司

席題「風鈴」　内藤きさ子選

風鈴の座敷へジャズの遠慮せず　阿茶
風鈴でも買うかあと間借りなり　吟女
風鈴は鳴らず扇風機はうなり　千里
風鈴も一雨ほしい顔でゆれ　生々庵
風のない日の風鈴は見上げられ　須賀太
おとなりの子が風鈴をほしがって　花奈女
扇風機とも知らず風鈴なり続け　冗歩
バイヤーの眼に風鈴がすがすがし　勢三
風向きが変って風鈴吊りかえる　知恵
風鈴も流行がありかかえる　良子
浮気した悔を風鈴知っている　浩青
風鈴へ社長の小言ふと忘れ　東岸
風鈴へビールの追加申しつけ　無鬼
風鈴へ逃げて女は息をつき　潮花
庭石のしめり風鈴鳴り止まず　茶仏
風鈴の音が気になる良い話　葉乙女
言い負けて風鈴へ耳傾ける　紅月
風鈴が死んでしまったむし暑さ　玲人
風鈴が錆びついたまま旧家なり　薫風子
灯を消してから風鈴のいい音色　紅月
十円の風鈴風にさからわず　清潮
風鈴屋二三度振ってから渡し　三司
瀬戸物の風鈴瀬戸物の音で鳴り　笛生
別館は風鈴の音も売るつもり　むじな
風鈴が鳴り出してから夕仕度　月都
風鈴も西陽のきつい家と知り　恒明

席題「息抜き」　永松東岸選

息抜きを国会でして落選し　越山
添寝して妻内職の息を抜き　紅月
息抜きをしているところへ社長が来　花奈女
先客があり息抜きの小使室　貴山
息抜きをしてから運がついてくる　玲人
息抜きに来て迄サインさせられる　むじな
息抜きに社長は秘書をつれてゆき　三十郎
息抜きに来て看護婦の話好き　水客
屋上へ来た息抜きは深呼吸　漣
息抜きに来て留守番をたのまれる　須賀太
息抜きに行って販路を拡げて来　月都
息抜きに冷し奴も乙ですね　十悟
息抜きに来た温泉が混んで居り　三司
息抜きの畦へキャンデー配られる　杜的
息抜きは女中に暇を出してから　笑司
息抜きにタカが映画で済ます母　黙平
息抜きも出来ぬ養子の子沢山　井平
息抜きもさせずに王手王手と来　文秋
人気スターここも息抜き出来ぬとこ　むじな
息抜いたところで横綱打棄られ　薫風子
息抜きに来た妾宅でいじめられ　狂二
三部経どこで息抜きしやはった　鳩花
息抜きやとえらいえらいとこで会い　吟女
息抜きにええがなゆっくり入院し　堰子
社用から一寸息抜く途中下車　多久志
息抜きの氷をつつくあじろ笠　樹峯
坂道の途中で後押し息を抜き　与邑志
息抜きに来た妾宅で薪を割り　省三
ほっとした浴衣へ往診言ってくる　阿茶
息抜きの煙草は秘書に話しかけ　潮花
息抜きの旅は手ぶらのまま出かけ　鶏汀
一べんは来た温泉で息をぬき　梅志

（庸佑清記）

川雑　淀川支部句会（大阪市）

武部香林選

嫌われているとも知らぬおせっかい　幽谷
おせっかいいやな処へ顔を出し　東洋男
おせっかい別れ話にしてしまい　清生
つれ合いに死なれてからの女傑なり　陽子
靴下のほころびぬっている女傑　三十郎
女傑のきょう和服の前が合ぬなり　三司
病にはかてぬか女傑やせてゆき　文児
切々の想いは秘めて女傑振り　灯子
平凡な妻の寝顔でいる女傑　水堂
賢妻のように他人は云うてくれ　さぎす
未亡人涙を拭けば他人の眼　若菜
労働歌の中に自分を発見し　香林

川雑　京都支部句会（京都市）

田中烏雀選

わが不貞夜のポストは音がした　治一郎
悪路乍らポスト不動の地位にいる　真砂
人の眼をポストを楯に待っている　烏雀
半日の悔石鹸で掌を洗う　礫
お掃除と立話しとでひるになり　喜由
嘘ついた報いが今日の茎菓子代　次郎
美しき花の報いを壺にゆきら　九角
女ずき報いは淋し孤独にい　句念坊
大切に育て養老院に住み　尚平
旅先の廊下冷たく雨止まず　晴芽
切手舌にのせてしばし旅のうたがある　親生
無我無中でした記録へほころびる　紫蘭
砂だけで子供は夢中になれる　司郎
夢中なるものに善人隙をもち　司郎

川雑　阿倍野支部句会（大阪市）

金井文秋報

手不足にやっと屋上げぼやくだけ　喜仙
アンタアンタと手不足へ呼び出され　凡九郎
手不足の忙しさおばんつんぼなり　豆秋
手不足の視線の中に義手義足　一三天
特ダネ特ダネ泥道もなんのその　恒明

泥道をわざわざ選って子が歩き　十悟
ショパンの音途絶えてバラの窓があき　堰子
泣きじゃくりしてきき分けるいじらしさ　藁光
バラの垣子の生きずへ夫婦もめ　栄子
善後策まだ奥の手は切り出さず　竹荘
奥の手を見透している煙草吸い　立児
まだ外に奥の手があるかくし芸　文秋
奥の手に黒の四三があとになり　梅里
はっとした瞬間しゃっくり止って居　庸佑
一間のバラへ跣足で社を忘れ　六竜子
愛された記憶が匂う薔薇の花　奈良子

川雑　**倉敷支部句会**（倉敷市）

椙原一善選

末筆をぼかして職は駄目らしい　萌芽
末筆でまた愚痴めいて長びいて　創七
ウタタ寝のさっぱり色気ない返事　一春
血圧も気にして色気も捨て切れず　陽子
奥様の前だけ旦那様と呼び　幽谷
上役の自慢を腹でおかしがり　葵丘
お決りの自慢話を聞き流し　香春
自慢の娘貰えばただの妻であり　隆文
旦那様来る日女中の休める日　飴ン坊
末筆に来ても用件判りかね　狂風
旦那様旦那様とて二号生き　平平
風船のしぼんだような色気もち　笑雷
御自慢へ半分意識の無いお酒　銀子
野心など無い口裏に嘘があり　麗水
末筆へ此の紅あとはキッスなの　一善
旦那様と呼んで呉れるは乞食だけ　春日
慾と色見せて商談負けとなり　万古
世話になる身だから自慢させておき　谷水

川雑　**大聖寺支部句会**（加賀市）

野村味平選

雨はらすだけをデパート見て廻り　そと枝
五月雨やニコヨン今日は軍を喰い　一路
さみだれて庭に手をつくひき蛙　光郎
雨乞いをすれば今度は降りつさき　恒雄
昂奮が醒れば口紅毒々し　酔羊
お疲れをかくす口紅派手にぬり　とよ
紅をます嫌悪の宵の美しさ　浪寿
口紅を直して姉は逢いにゆき　味平

川雑　**鳥取支部句会**（鳥取市）

河村日満選

虚勢張る男へ無理に逆らわず　武夫
欠点はパチンコだけと紹介し　月光
ホームランスリも一緒に手をたたき　辰春
欠点を笑う仲間に俺も居る　湖水
掛軸をほめて仲人話しかけ　勝人
苦情云う糸口探す倦怠期　酔狂児
欠点をさぐり合ってる女の目　菊水
性格の欠点美貌がカバーする　英夫
欠点を見抜いて嫌な柄になり　貴美子
商談の糸口茶器をほめておき　夢生
飲むだけが欠点ですと妻こぼし　秀和
倦怠期思わぬ欠点見つけたり　天保銭
金策へ今日切抜ける虚勢張り　穂波子
糸口がほぐれて軽いペンとなり　鳴恍
お喋りの糸口がつき座り込み　耕民
ざん悔して夢中であった日が恐わし　湖山
ストの駅駅長助役馳け廻り　星影
欠点をみんな話してプロポーズ　芳道
恋中の欠点あろうとなかろうと　多可志
虎の威を借りた意見へ食い下り　三歩
美人だが冷たすぎるとけわをつけ　茗人
女なる虚勢は一人になって泣き　遊星
惜しいことにはと頭を指で巻き　日満
花の苗病棟中の瞳で育て　まき子
偶然が自信に変るほど当り　万古人
カタログのように縁談持ちこまれ　岬月
見本市センスを欠いたのが残り　代仕男
一と筋の苗に稔りのこもる日々　美好
偶然にしては仲人行き届き　朱紅
偶然を喜び合うた京の街　壮
同業と知らずサンプルまで渡し　章峰
温床の苗に似ている社長の娘　独仙
一失へああ偶然という事実　緑之助

平田句会

負け惜しみ酔わない酒へ野暮になり　加寿緒
犯人は猫とわかった足の跡　岩雄
楽書の壁を曲った三軒目　健一
大臣の似顔が並ぶ白い壁　酔酊翁
運勢にすべて負わして負け惜しみ　万古人
釣れそうな浮木を蛙に抱きつかれ　代仕男

川雑　**岡山支部句会**（岡山市）

津田麦太楼報

高原の駅牛乳に迎えられ　三林坊
十代の恋を卸の色にひめ　流風
どんぐりの高さを首相並べて見　承平
つばくろが並んで子等の歌がもれ　耕水
木撒いて駅のホームの昼下り　麦太楼
駅を出てアベック一寸空を見る　矢寸志
出来かけているなと番台横目で見　陽子
二号おく家賃とことんまで値切り　幽谷
銭湯の帰り素足がなまめかし　葵丘
銭湯で生活の底を探り合い　山水
どんぐりの夫に妻の柳腰　十七
分校の子はどんぐりの独楽まはし　秋月
不景気へ家賃が高い店の位置　晶晶
どんぐりが祖先の墓ではね返り　美音子
双児やったそうなと女湯で噂さ　飴ン坊
団栗の工作上手に与次郎兵衛　半翁

川雑　**弓削支部句会**（岡山県）

直原七面山選

速報に火花を散らす記者クラブ　南鉱
笑顔して火花を散らす恋敵　周甫
新旧の意見火花を散らし合い　ちとせ
叱られる予感お世辞を並べ立て　たつよ
筆不精一筆詫びたまま無音　銀子
詫びだとも言えず包をそっと出し　一草
書置きに詫びるインキの字がにじみ　水雲
意に添えぬ詫びの手紙は薄く書き　美沙
詫びにやる子供すかして送り出し　賤女
お隣りへ詫びる子供を連れて行き　喜楽
馬子の顔が青く染っている木蔭　美舟
葉の影が顔で揺れてるハンモック　青柿
天国へ行って来たように牧師言い　流風
天国へ行けと涙で手を組ませ　知恵美
十字架抱く瞳天国疑わず　竜児
天国がここにもあったなわのれん　七面山

川雑　**広島支部句会**（広島市）

平田越舟報

末席の意見が皆んなを振り向かせ　二三夫
門限へ手ごわい父の目が浮び　鶯生
門限がないようである新家庭　満歩
門限が迫りパチンコ入り出し　筧水
給料日帰る道順違って居　うしを
正論もボスの意見にゆめられ　上利
御礼云われて内緒ついばれる　弓路
子に意見時世のズレを歯痒がり　自然
意見きく耳にジャズ聞くティンエイジャー　吐川
御意見もきかぬ頑固をもって死に　秀月
次の子も頼む御礼はずんどき　木公
強意見どこ吹く風とアプレの娘　裸像
門限のある会館は安く泊め　十進
門限の暮しがつづく寮住い　季賛

門限を過ぎたに言えぬ義理があり　越舟
御意見はありませんねと押しつける　俊見
収賄にされる御礼と気がつかず　幽香里

川雑　**小松支部句会**（小松市）

伊藤茶仏報

夜明から待って居ました釣天狗　多恵子
解禁日鮎めずらしい餌に迷う　千太郎
雑草が刈られ都市計画進む　寿
雑草の奥に遺跡が忘れられ　宗太郎
雑草の如き暮しに花も活け　城南
雑草を育てただけの移植鏝　正柳子
床の間の草花得意や想うべし　吉枝
雑草の花は真夏の陽を弾き　茶仏
雑草にされまいタンポポ高く咲き　たつ路
見ぬ振りが出来て銀婚式も過ぎ　やすえ
電器釜あなたも炊けるから買い　寿美絵
飲屋街ここも朝刊突きささり　一進
つつましい母の暮しに仏の灯　錦水
解禁へまだまだ駄目という会社　香径

川雑　**にしなり支部句会**（大阪市）

後藤梅志選

科学する子供へカビの面白さ　玲人
珍客へ布団を出せばかびくさし　太路
吹き抜ける風かびくさい五月晴　利幸
顧問にかびの生えてる人を置き　五色
社会悪スラムの隅にかびと生き　旅風
形見分けかびのあるのも見逃さず　梅里
昂奮はせぬよと余憤抑えかね　雄声
寝ころんだ余憤の足へ蚊がとまり　貴山
整形科どうにもならんのが来　省三
内職のためいきとなり午前二時　淡海
ためいきと一緒に飲んだコップ酒　庸佑
誘惑へ雨は斜にふっている　満潮
立札は死の誘惑へ待てとあり　文秋
地下鉄へ降りるに惜しい南の灯　堰子
誘惑のきっかけ義理を絡ませる　牧人
水平線御苦労様と陽をかくし　清人
夕風に恋のヨットは揺れていく　悟朗
浜の子へ海女の乳房がもの足らず　漣
何をしに来たのか水着濡れていず　敏子
ロマンスを秘め桜貝しまい込み　歌子
海もまた呼吸している波がしら　凡九郎
氷海に住みペンギンのこせつかず　すゝむ
子にせがまれ親父初めて海を知り　昭夫
思い出を泣きに海まで来た女　晃
スコールが来るぞ石鹸つけて待ち　闌
海からの帰りギュウギュウ詰めにされ　多久忘
浅果な怒りを海に笑われる　薫風子
なつかしい海が見えるとすぐ故郷　梅志

川雑　**篠山支部句会**（兵庫県）

小西無鬼選

酒の相手としての幹事に指名され　永断
相手が相手本気で聞けぬ儘け口　文峯
相手が弱過ぎましてんやと優勝し　左文字
山奥もダム完成で観光地　たけし
石段の奥の大杉格をしめ　小菊
押入れの奥で鼠がちちこまり　秋月
奥の院舟で詣れるダムが出来　枝葉
名門と云う奥からの風涼し　ひか平
泥の手が気にもならない農繁期　よし子
泥はねて走れば小気味よかるべエ　一雨
これだから猫は嫌いや泥の跡　みのる
うれしさは泥も厭わぬ嫁が来る　無鬼

川雑　**玉造支部句会**（大阪市）

徳永雅美報

起されずおきるは釣に行く日だけ　貞句朗
朝寝からさめればまぶしいものばかり　清子
朝寝してほしい子供は早う起き　一栄
掛ぶとんかぶって朝陽をさけてねる　光女
パンにして夫婦朝寝の癖がつき　有岡
朝寝する母が不安な子の瞳　六竜子
朝寝して昼寝もしてる里帰り　一栄
共稼ぎすねてすまない朝寝をし　柳宏子
うつうつと母の念仏聴く朝寝　文秋
皆どろ棒に見える銀行帰り途　登志子
待呆けに月がきれいな帰り道　文秋
朝の空気をたのしんで居る散歩　白柳子
たのしんで居たのに妻に目をおかれ　甚也

川雑　**ハワイ支部句会**（ハワイ）

古川魔花麗選

健康な細腕一家支えぬき　気七有
健康を保ち仲よきその暮し　周防
擦り傷の絶える間もない子の元気　弘桂
健康を語る微笑み貧に堪え　凡平
財産が出来て健康欲しくなり　拝山
健康を思うて西式又初め　紅茶
健康な踊り娘見入るファインダー　黒頓
健康を財産にして嫁を取り　弦月
ダクターはノーティカネと古稀誇り　砂丘
健康なだけが取柄の女房なり　快夢起
闘病へ知る健康の有難さ　泉水
健康美よりも痩身を大事がり　風原
健康法洩らさずやって医者通い　快夢起
健康食妻心得て一家無事　エス子
健康をストライカーは持て余し　いろは
医者知らずすくすく育つ子沢山　北海
健康を神信心のせいに着せ　富美子
ミス日本近代的な健康美　瑠璃子
掛捨ての傷病保険三十年　笑流
健康になったで神に御無沙汰し　いつ生
お達者でお暮しなさいと切れた妻　魔花麗
健康は嬉しいものよ酒とろり　迷朗
澄み切った眼で健康な娘が笑い　斧平
ともかくも健康だけと云う親節　暁舟
健康で居て下さいと逃げられた　浪之助
健康のシンボル又も年子です　八丁堀
天二物与えず達者と云う許り　柳葉
健康がますます野心かき立てる　草一郎

川雑　**木次支部句会**（島根県）

藤井明朗報

高原の緑を恋うて若い群れ　春桜子
新緑へ失恋の瞳うつろなる　迷調子
伏字など入れて楽しい恋日記　幸夫
母の日を楽しみにして野良仕事　あき子
母と娘の手料理楽しい日曜日　寿美子
立候補する日落選考えず　洋傘
落選の事務所はしんと声がなし　明暗
ハイヒールよろけて螢取り逃がし　すみ子
二ありへ螢がパッと輪をえがき　明朗
田舎にも食う米がない次男坊　正喜
子沢山田舎へ帰る閑がなし　佳男
新妻の料理を覗く台所遊子
台所から合図があった酒の席　鹹果

川雑　**米子支部句会**（米子市）

小西雄々報

くたびれた肌に冷たい手切金　吾柳
化けて出てやると怒った手切金　日満
慰謝料と呼べばやさしい手切金　学人
一切を白紙にかえした手切金　千三
手切金お腹の子供がうけつけず　蛙眠子
手切金なくなる頃にまたみつけ　節枝
手切金取るまで智恵をかりに行き　幸子
女房が勝気手切金を出し　天邪鬼
手切金だけの仲かと泣きつかれ　蘇生
小切手をさらさらと切る手切金　紅帆
明日からの旦那が変る手切金　雄々
手切金もうパトロンがある話　詩郎

結ぶのもお金切れるのもお金　一保
小切手になぐり書きした手切金　鶴丸
手切金だけでは女許さない　美喜江
手切金社長へ一本釘を打ち　庄太
にせ物も同じ匂いのホルモン屋　一机
恐妻にばれて未練な手切金　風塵
無視された慕情の前に手切金　美笑

雑川 高知支部句会（高知市）

川竹松風報

面白い程つれるのに早や暮れる　秀久
下端が面白がられる芸を持ち　汀
面白いところで切って気をもたせ　博
天職か知らんが面白うない仕事　正雄
面白いレター独りニコニコし　春子
面白い事にも触れて叩き売り　梅林
面白い処はないかとなぞをかけ　和泉
面白い本を沸きたつ鍋が呼び　守
逆転のチャンスへ小西節を出し　康之介
来客へ居眠りしていたあわてよう　茂喜
眠ってる子がおり話細うなり　幸陽
あんよが上手歩けば狭い家になり　実
居眠りのようでも要点聞いており　俊一郎
早や二つ取って手をかむ猿の蚤　酔雀
常連へうれしい嘘をマダム言い　義生
上手下手皆な可愛いい幼稚園　鶴亀
本当の上手人前で恐縮し　松風
口下手な娘で皆伝の花を活け　寛
はっきり言えば上手がなさすぎる　蟠蛇
人様は上手と云うに腑におちず　迷窓
せっかちへブレーキかける京言葉　一哲
一目ぼれええとこだけが目に浮び　同
そうどすえなどと結構気は強し　比呂史
顔見世のどすとおますが隣り合い　阿茶
ええとこの帰りアリバイ作りに来　同
先生と呼ばせて女史の男秘書　同
ええとこはおれに似とるとおやじ言い　葭明
ええとこ丈で連中随いて行く　珊枝郎
女史こんな代議士候補に立つと云う　同
ええとこもおます連れ添うて二十年　生々庵
司会者に女史と呼ばれて気をよくし　同
演壇の女史姑の顔でなし　同
身だしなみ忘れぬ女史の三面鏡　太希志
肩越しのことばも山も霞む京　葭乃
ベストセラー女史の生家も撮される　同
よろめいておいてかんにんえですます　路郎
金かえすとこがあいつのええとこさ　同

3・3・3川柳会（堺市）

川村好郎選

貧乏の味方は公約だけのこと　圭水
正直が何よりですと貧乏ほめ　狂二
貧しさを言わず親子はよく動き　南宗
心臓の高なりこれが恋かしら　雪山
心臓の弱い養子を探している　雄声
心臓と別に情婦という弱味　圭水
応援の弁士の方がうけていた　雄声
応援の弁士自己宣伝を忘れない　狂二
応援団野球を知らぬのもまじり　好郎
大臣の笑顔選挙中だけのこと　雪山
よい噂でもないらしい笑い声　南宗
失敗も過去なればこそ笑い合い　好郎
屋根に羽根残し正月終りたり　寿栄
栄転へ無口も少し口をきき　薫風子
栄転に月賦の借がついてゆき　球絵
栄転で妻にも苦労増えるなり　芙路
栄転へ猫は淋しく置いとかれ　すみ江
栄転の祝辞を妻に読んで見せ　夢路
栄転の辞令呑み屋に忘れて来　彗星
栄転が山間僻地の支店長　圜男
出来心と言うにはお膳立てが過ぎ　すゝむ
出来心司直の前で泣きじゃくり　まこと
その過去が簞笥の奥にしまわれる　三舟
つらかった過去を忘れてよく使い　川太郎
過去を知る人が頭を下げてくれ　鵜汀
その過去を知りたい程の美人が来　鬼美
口癖の一つ夫を賞めちぎり　弦月
家内の好みで歩く京の春　舟遊

薬屋根のアンテナだけがよく光り　憲一

明和研究句会（西宮市）

薫風子報

大阪遞信病院川柳会（大阪市）

橋本幸男報

お色気のなくなる頃に金が出来　方正
商談へ色気はなれた四畳半　幸男
気の弱いのがまちがいを背負わされ　竹荘
まちがいと言わぬ谷へ落ちたバス　史葉
まちがってましたと素直に云える子に育ち　宏子
妻だけが知る気弱さの汗をかき　桃村
汗かきが汗かきを見て同情し　没食子
およばれの席もう恥しい汗をかき　夏生
コマ切れを買うのに連が邪魔になり　よしを
こまぎれのように満員押出され　草右
こま切れにしたとは何と兇悪な　春雄
スキヤキも名ばかりコマ切二つ三つ　ハナ子
コマ切れに意見が割れてはかどらず　史葉
特売の隅でコマ切買って去に　幸男
コマ切れですます夕餉も親と娘の　路郎
コマ切れのくらしはイヤと共稼　同

南海電鐵川柳会（大阪市）

目が肥えている晩婚が踏み切れず　梅志
珍客へまあまあまあと床柱　狂二
床柱うしろに左遷酔いきれず　宏子
今晩も会議だっかと妻先手　好郎
更生を誓う教会の固い椅子　六竜子
バイブルへステンドグラス光さし　貴山
讃美歌が流れて教会黄昏れる　雄声
にこやかに牧師大きな手をのばし　のぼる
教会は空気も違うように見え　圭水
我が血なりというぶどう酒をなめさされ　路郎

たけべ川柳会（岡山県）

野々口美舟報

折角の記念写真へ眼をつむり　ちとせ
決算の黒字は春のストで消え　秀波
怒っても泡ふくだけの蟹哀れ　美沙
冷汗をかかせて道の子まりを追い　一善
記念品だからと高いとこへ置き　賤女
決算の赤字を里の母がみる　美舟
自殺する覚悟水面の泡を追い　七面山

鮨と料理と酒
アベノ橋地下映画食通街
千日前 ㊐〇一四七 大劇裏
梅里の店 大萬

★大万川柳（第九十回）を募る
兼題「博士」路郎先生選
締切・八月十五日（句数五句以内）
発表・八月廿一日（店内掲示）
投句は 阿倍野区松崎町三丁目 一〇 大万川柳会宛

8月の句会

川柳雑誌社支部

淀川句会
時 4日(月)六時
題 悪あがき・どんた・空腹
所 十三西之町五丁目東淀川郵便局

玉造句会
時 10日(日)七時
題 西瓜・マッチ
所 天王寺区宰相山一四八西出一栄居

阿倍野句会
時 20日(水)六時
題 抵抗・裸・無料
所 旭町二丁目 金塚会館

にしなり句会
時 21日(木)六時
題 妻・浮雲・お神輿(だんじり)
所 玉出新町通一の一梅志居

3 3 3 句会(傘寿を祝う句会)
時 5日(火)六時
題 祝・奇蹟・バッジ
所 堺市老松町三丁島野工業KK

みおつくし句会
時 12日(火)六時
題 若葉・性分・枕
所 大道一ノ二二天王寺小学校

交通局句会
時 13日(水)
題 水・足・虫
所 扇橋交通局病院サンルーム

明和研究句会
時 17日(日)一時
題 お茶・浴衣・欠伸
所 明和興業KK・和室

南海電鉄句会
時 28日(木)六時半
題 急停車・夏やせ・出勤簿
所 ナンバ駅高架下親和くらぶ

小松句会
時 1日(金)六時半
題 グラス・深夜
所 小松市大和町 伊藤茶仏居

鳥取句会
時 2日(土)五時半
題 浜・魚・夏の姿
所 賀露海岸

篠山句会
時 9日(土)一時
題 裸・怪談・帰郷
所 篠山町立町 池富旅館

米子句会
時 10日(日)一時
題 ほくろ・さよなら・急ぐ・背伸び
所 米子市公会堂 日本間

宇部句会
時 10日(日)夕
題 農薬・古傷・嬉しい日
所 東区恩田長沢 津秋六花居

京都句会
時 16日(土)夕
題 星・手ざわり・洋菓子
所 四条縄手 仲源寺

備前句会
時 16日(土)
題 人情・反対・牛乳・広告・筆蹟
所 未定

広島句会
時 24日(日)十時
題 なまけ者・底意・気まぐれ
所 広島市尾長町東山根角上利居

弓削句会
時 8月末日〆切(投句のみ)
題 瞬間・帰える・調子・クチャクチャ
所 岡山県久米郡久米南町直原七面山

・青ペン・赤ペン・

▼昨年の夏より、本年のほうがずっとお元気に思われるほど路郎主幹のペンが早い。これはご健康を意味するもので、夏バテを知らぬボクが、本号では完全に先生の原稿に追いまくられ、ページの組が後手へ後手へとまわらざるを得なかった。

▼夏枯れも夏やせもせず、ちょっとは自慢もしたくなる本号の充実さ、いかがなもんでしょうか。「大阪の民俗を語る」これは主幹の企画によるものではあるが、このスタッフ、この豊富な内容は、デラックス8月号の中心をなすものである。

▼「作句上のスランプ」はスペースの関係上、充分書いていただけないうらみはあったが、アンケートのあまり長いのは先き様がごタイクツされよう。

▼路郎先生のご誕生日を祝う、川雑川柳まつりは、文月の柳宴として年々盛大になっていく、先生のご人徳である。

▼社告にあるように、九月二十日〆切分から一路集の投句数が十句以内になったが、一題ふえて三題になったので勉強にはプラスになるでしょう。

▼次号から婦人友の会のスペースを一ページとる予定である。金泥集のほかに、女流作家の原稿を載せていきたい。奮ってご寄稿ください。(三、四枚程度)

▼高鷲亜鈍氏が医師にさからってまで眼病をおして堂々七十枚の「須崎豆秋論」を寄せられた。柳界の一茶とまで言われる人間豆秋をえぐる、氏の健筆にご期待ください。

▼小学校時代からの仲よしトリオ、木客、紫香、潮花三氏の句集「三人」がいよいよ今秋誕生する。いずれも人気作家だけにその前評判は上々である。柳界に新風をおくるであろう「三人」の本になる日が待ち遠しい。

▼毎月文楽座の別館で、芸能人や漫才作家やコント作家で小ばなしを作る会が催されている。七月例会で表彰された某氏は、数年間の連没にめげず、黙々と全出席したその努力を買われたものである。句会や雑詠で数回の没にくじけるようでは、漫才屋さんからアベコベに笑われそうである。

▼あと二行で当分徹夜ともお別れです。(一三夫)

社告
—一路集について—
九月号から三題になります。投句数を十句以内に改め、各位の自選力を養っていただきます。佳吟を寄せられれんことを。川柳雑誌社

川柳雑誌社

麻生路郎
麻生葭乃
中島生々庵
西尾栞

編集局
北川春巣
戸田古方
清水白柳子
八木摩天郎
丸尾潮花
真鍋一瓢
水谷竹荘
不二田一三夫
後藤梅志
橘高薫風子

句会部
黒川紫香

総務部
武部香林
林宏子

暑中御伺

川雑 婦人友の会

会員募集

川雑婦人友の会連絡事務所
大阪市生野区中川町2の30
丸尾潮花

麻生葭乃著・米田三男之介装幀

葭乃句集 福壽草

定価二百五十円
送料 三十円
菊半型・函入

本書は川柳の母・麻生葭乃女史の異色ある作品の金字塔です。各方面から御好評をいただいて居ります。

大阪市住吉区万代西五の二五
発行所 川柳雑誌社
振替口座大阪七五〇五番 電話住吉(67)六〇八一

正本水客・黒川紫香・丸尾潮花著

川柳句集 三人

本書は限定出版故この機を逸したら再び手に入らぬ。予定数に達し次第〆切りますから御申込まれたい。

定価 二百円
送料 二十四円
B列6号 二百余頁

句集刊行に就いて

路郎門の逸材、正本水客、黒川紫香、丸尾潮花の三氏が川柳精進三十年の収穫の中から特に優秀なる作品を選出し、恩師麻生路郎先生の校閲を経て弘く世におくり、その真価を問うため来る十月中旬を期し川柳句集「三人」を刊行することとなった。

三氏は小学時代の同期生であるが、社会に出てから異なる職域に就いても絶えず親交を続け、趣味も亦軒をならべて川柳に遊び早くより川柳不朽洞会員として二十有五年の歳月を斯道の研鑽につとめられたことは柳界にも稀に見る存在である。

かかる三氏が元就の故智に倣い相協力して一巻の句集を編むことは三氏三様の異色のある作品に光彩あらしめ且つ読むものをあかきない点で最良の方法ではないかと思う。

三氏の作風については既に定評があるので今更喋々を要しないところであるが、水客氏の作品は常に高度の句品を保ち、その庶行吟の如きは特に優秀で、読者をして氏の句境に共に浸たるおもいをさせられるものであり、紫香氏の作品は情味に富み、特に氏のウイ眼による動物吟の如きは他氏の容易に追随を容さぬものがあり、潮花氏の作品に至っては女性的感傷味が横溢、時に幽艶なる情緒に魅惑を感ぜしめられるのである。

右に述べた三氏三様の名句集を繙くことにより後進は自己の行くべき道を暗黙のうちに悟ることが出来るとするなれば著者はもとより我が刊行会としても望外の幸とするところである。

何卒、江湖諸兄姉の御協賛をたまわりたく、左記により是非一本を座右に備えられんことをお願いする。

昭和三十三年八月

★出版予定日・昭和三十三年十月中旬、五百部限定出版に付き御申込は早く★御送金は川柳雑誌社の振替口座大阪七五〇五〇番を御利用が便利です(切手代用可)

発行者 川柳句集「三人」刊行会
大阪市住吉区万代西五の二五

発行所 川柳雑誌社
電話住吉(67)六〇八一
振替口座 大阪七五〇五〇番

募集

課題吟募集

ミシン(廿句以内) 小西無鬼選
旧家(廿句以内) 八木摩天郎選
女子大(十句以内) 戸田古方選
靴磨き(十句以内) 友淵貴山選
風船(十句以内) 杉谷湖山選
(九月二十日締切)

毎号募集

近作柳樽(雑詠廿句以内) 麻生路郎選
川柳塔(雑詠十句以内) 北川春巣選
文章(評論・研究・感想其他) 麻生路郎選
(毎月二十日締切)

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼『近作柳樽』は一般作家の雑吟を募る。
▼『課題吟』は誰でも投句が出来る。
▼『川柳塔』えの投句は不朽洞会員に限る。

printed in Japan

B列5号 毎月一回一日発行
川柳雑誌 第十三巻 第八号
定価 六〇円
(送料四円)
半カ年 三八四円
一カ年 七二〇円
昭和三十三年七月廿五日印刷
昭和三十三年八月一日発行
大阪市住吉区万代西五の二五番地
編集兼発行印刷人 麻生幸二郎
大阪市住吉区丙万代西五の二五番地
発行所 川柳雑誌社
電話 大阪(67)六〇八一
振替口座 大阪七五〇五〇

(禁轉載)

昭和二十三年七月一日第三種郵便物認可
昭和二十三年八月一日発行（毎月一回一日発行）
編輯兼発行人 宮崎孝二郎
発行所 川柳雑誌社
大阪市住吉区住吉町字代西五十自二五番地 電話阪神六〇八一 振替口座大阪七五〇五〇番
定価六十円（送料四円）

山之内

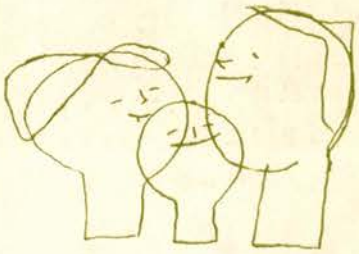
水虫の専門薬

水虫には、断然御好評をいただいているアルバー！ 乾いた水虫には液、湿った水虫には粉末、両方に使える軟膏！
3種で水虫の立体治療を！

アルバー

東京・大阪 山之内製薬株式会社 福岡・札幌

一家そろつてホーライ党



廣東料理

蓬莱

大阪なんば・TEL ㊹551—2

楽しい…… お台所に

いますぐ、どこでも使える
新しい経済的な家庭燃料
御一報次第資料送呈又
特約店を御紹介致します

マル井プロパンガス

岩谷産業株式会社
本社 大阪市東区本町3 電話大阪㊻代表3251・8251
営業所 東京・名古屋・京都・大阪・堺・尼崎・神戸・松江・広島・小倉